

桜の園

——喜劇 四幕——

アントン・チェーホフ

青空文庫

人物

ラネーフスカヤ（リュボーフィ・アンドレーエヴナ）〔愛称リュ
ーバ〕 女地主

アーニヤ その娘、十七歳

ワリーヤ その養女、二十四歳

ガーエフ（レオニード・アンドレーエヴィチ）〔愛称リョーニヤ〕
ラネーフスカヤの兄

ロパーヒン（エルモライ・アレクセーエヴィチ） 商人

トロフィーモフ（ピョートル・セルゲーエヴィチ）〔愛称ペーチ
ヤ〕 大学生

ピーシチク（ボリース・ポリーソヴィチ・シメオーノフ） 地主

シャルロツタ（イワーノヴナ） 家庭教師

エピホードフ（セミヨン・パンテレーエヴィチ） 執事

ドウニヤーシヤ 小間使

フィールルス 老ろうぼく僕、八十七歳

ヤーシヤ 若い従僕

浮浪人

駅長

郵便局の官吏

ほかに客たち、召使たち

ラネーフスカヤ夫人の領地でのこと

第一幕

いまだに子供部屋と呼ばれている部屋。ドアの一つはアーニヤの部屋へ通じる。夜明け、ほどなく日の昇る時刻。もう五月で、桜の花が咲いているが、庭は寒い。明けがたの冷気である。部屋の窓はみなしまっている。

ドウニヤーシヤが蠟燭ろうそくをもち、ロパーヒンが本を手に登場。

ロパーヒン やつと汽車が着いた、やれやれ。何時だね？

ドウニヤーシヤ　まもなく二時。（蠟燭を吹き消す）もう明るい
ですわ。

ロパーヒン　いったいどのくらい遅れたんだね、汽車は？　まあ
二時間はまちがいあるまい。（あくび、のび）おれもいいところ
があるよ、とんだドジを踏んじまった！　停車場まで出迎え
るつもりで、わざわざここへ来ていながら、とたんに寝すごし
ちまうなんて……。椅子いす子にかけたなりぐつすりさ。いまいまし
い。……せめてお前さんでも起してくれりやいいのに。

ドウニヤーシヤ　お出かけになったとばかり思っていました。（耳
をすます）おや、もういらしたらしい。

ロパーヒン　（耳をすます）ちがう。……手荷物を受けとったり、

何やかやあるからな。……（間）ラネーフスカヤの奥さんは、
外国で五年も暮してこられたんだから、さぞ変られたことだろ
うなあ。……まったくいい方かただよ。きさくで、さばさばしてて
ね。忘れもしないが、おれがまだ十五ぐらいのガキだった頃、
おれの死んだ親父おやしが——親父はその頃、この村に小さな店を出
していたんだが——おれの面つらをげんこで殴りつけて、鼻血を出
したことがある。……その時ちようど、どうしたわけだか二人
でこの屋敷へやって来てね、おまけに親父は一杯きげんだった
のさ。すると奥さんは、つい昨日のことのように覚えているが、
まだ若くつて、こう細つそりした人だったがね、そのおれを手
洗いのところへ連れて行ってくれた。それが、ちようどこの部

屋——この子供部屋だったのさ。「泣くんじやないよ、ちつちやなお百姓さん」と言つてね、「婚礼までには直りますよ（訳注 怪我をした人に言う慰めの慣用句）。……」（間）ちつちやなお百姓か。……いかにもおれの親父はどん百姓だったが、おれはというと、この通り白いチョッキを着て、茶色い短靴たんぐつなんかはいている。雑魚ざこのととまじりさ。……そりや金はある、金ならどつさりあるが、胸に手をあてて考えてみりや、やつぱりどん百姓にちがいはないさ。……（本をばらばらめくつて）さつきもこの本を読んでいたんだが、さつぱりわからん。読んでるうちに寝ちまつた。（間）

ドウニヤーシャ 犬はみんな、夜つびて寝ませんでしたわ。嗅かぎ

つけたんですわね、ご主人たちのお帰りを。

ロパーヒン おや、ドウニヤーシヤ、どうしてそんなに……

ドウニヤーシヤ 手がぶるぶるしますの。あたし気が遠くなつて、
倒れそうだわ。

ロパーヒン どうもお前さんは柔弱でいかな、ドウニヤーシヤ。
みなりもお嬢さんみたいだし、髪かっこうの格好だつてそうだ。駄目だめ
だよ、それじゃ。身のほどを知らなくちや。

エピホードフが花束をもつて登場。背広みがを着こみ、ひどくギ
ユウギユウ鳴る、ピカピカに磨きあげた長靴みかをはいている。
はいつてきながら花束を落す。

エピホードフ（花束をひろう）これを庭男がとどけてよこしました。食堂に挿すさようにつてね。（ドウニヤーシヤに花束をわたす）

ロパーヒン ついでにクワスをおれに持つてきとくれ。

ドウニヤーシヤ かしこまりました。（退場）

エピホードフ 今ちようど明け方の冷えで、零下三度の寒さですが、桜の花は満開ですよ。どうも感服しませんなあ、わが国の気候は。（ため息）どうもねえ。わが国の気候は、汐しおどきにびたりとは行きませんですな。ところでロパーヒンさん、事のついでに一言申し添えますが、じつは一いっさくじつ昨日、長靴を新調した

ところが、いや正真正銘のはなし、そいつがやけにギユウギユウ鳴りましてな、どうもこうもなりません。何を塗ったもんでしようかな？

ロパーヒン やめてくれ。もうたくさんだ。

エピホードフ 毎日なにかしら、わたしには不仕合せが起るんです。しかし愚痴は言いません。馴なれっこになって、むしろ微笑を浮べているくらいですよ。

ドウニヤーシャ登場、ロパーヒンにクワスを差出す。

エピホードフ どれ行くとするか。(椅子にぶつかって倒す)ま

た、これだ。……（得意げな調子で）ね、いかがです、口幅つたいことを言うようですが、なんたる回り合せめぐでしょう、とにかくね。……こうなるともう、天晴あっぱれと言いたいくらいですよ

！（退場）

ドウニヤーシャ　じつはね、ロパーヒンさん、あのエピホードフがあたしに、結婚を申しこみましたの。

ロパーヒン　ほほう！

ドウニヤーシャ　どうしたらいいのか、困ってしまいますわ。……おとなしい人だけれど、ただ時どき、何か話をしだすと、てんでわけがわからない。聞いていれば面白おもしろいし、情じょうもこもっているんだけど、ただどうも、わけがわからなくってねえ。

あたし、あの人がまんざら厭いやじゃありませんし、あの人ときたら、あたしに夢中なんですの。不仕合せな人で、毎日なにかしら起るんです。ここじゃあのこと、「二十二の不仕合せ」
つて、からかうんですよ。……

ロパーヒン （きき耳を立てて） さあ、こんどこそお着きらしいぞ……

ドウニヤーシャ お着き！ どうしたんでしよう、あたし……からだじゆう、つめたくなつたわ。

ロパーヒン ほんとお着きだ。出迎えに行こう。おれの顔がおわかりかなあ？ なにせ五年ぶりだから。

ドウニヤーシャ （わくわくして） あたし倒れそうだわ。……あ

あ、倒れそうだ！

二台の馬車が表口へ乗りつける音。ロパーヒンとドウニヤー
シヤは急いで出て行く。舞台空虚。つづく部屋部屋で、ざわ
めきのはじまる。ラネーフスカヤ夫人を停車場まで迎えに行
った老ろうぼく僕ぼくフィールスが、杖つえにすがりながら、あたふたと舞
台をよこぎる。古めかしいお仕着せに、丈の高い帽子をかぶ
り、何やら独りごとを言っているが、一言も聞きとれない。
舞台うらのざわめきは、ますます高まる。「さあ、こつちか
ら行きましようよ……」という声。ラネーフスカヤ夫人、ア
ーニヤ、鎖につないだ小犬を連れたシャルロツタ、以上みな

旅行服で、——それから外套がいとうにプラトークすがたのワリーヤ、ガーエフ、ピーシチク、ロパーヒン、包みとパラソルを持ったドウニヤーシヤ、いろんな荷物をかかえた召使たち——みなみな部屋に通りにかかる。

アーニヤ　ここを通つて行きましようよ。ねえママ、この部屋なんだか覚えてらつしやる？

ラネーフスカヤ　うれ嬉しそうに、なみだ声で）子供部屋！

ワリーヤ　なんて寒いんだろう、手がかじかんでしまったわ。

（ラネーフスカヤに）あなたのお部屋は、白いほうもスミレ色のほうも、ちゃんと元のままですわ、お母さま。

ラネーフスカヤ 子供部屋、なつかしい、きれいなお部屋……。

わたし子供のころ、ここで寝たのよ。……（泣く）今でもわたし、まるで子供みたいだわ。……（兄とワリーヤに、それからまた兄にキスする）ワリーヤはちつとも変らないのね、相変らず尼さんみたいね。ドウニヤーシャも、わかりましたよ。……（ドウニヤーシャにキスする）

ガーエフ 汽車は二時間もおくれた。え、どうだい？ なんてぎまだろう？

シャルロツタ （ピーシチクに）わたしの犬は、クルミも食べるのよ。

ピーシチク （呆れ顔で）^{あき}へえ、こりや驚いた！

アーニヤとドウニヤーシヤのほか、一同退場。

ドウニヤーシヤ やつとお帰りになった、……（アーニヤの外套と帽子をぬがせる）

アーニヤ わたし途中四晩も眠れなかったの……今じやもう、ここへあがつちまつたわ。

ドウニヤーシヤ あなたがたがお発たちになったのは、大たい齋さいのころ（訳注 復活祭に先だつ七週間の精進期間で、年によって違うが、およそ二月初めから三月初旬までの間になる）で、まだ雪がふつて、ひどい凍いてつきようでしたが、今はまあどうでし

よう？ 可愛いお嬢さま！ （笑って、アーニヤにキスする）
待ち遠しかったですわ、大好きな、可愛いお嬢さま。……早速
ですけど、あたしお話がありますの。一分間だって待てませ
んの……

アーニヤ （だるそうに）また、なんの話……

ドウニヤーシャ 執事のエピホードフが、復活祭のあとで、あ
たしに結婚を申込みましたのよ。

アーニヤ いつも、おんなし事ばかり……（髪を直しながら）わ
たし、ピンをみんな落してしまっただわ。……（疲れきって、よ
ろよろしている）

ドウニヤーシャ どう考えたらいいか、困ってしまいますわ。あ

の人、あたしを愛してますの、とても愛してますの！

アーニヤ （自分の居間のドアをのぞきこみ、なつかしそうに）
わたしの部屋、わたしの窓、まるで旅行なんかしなかつたみたい。わたし、うちにいるのね！ あした朝おきたら、すぐ庭へ出てみよう。……ほんとに、ちよつとでも寝られたらよかつたのにねえ！ 道中ずっと眠らずじまい、なんだかとても気にかかつて。

ドウニヤーシャ いっさくじつ一昨日、トロフィーモフさんがいらつしやいました。

アーニヤ （嬉しそうに）ペーチャが！

ドウニヤーシャ ふろばお風呂場で寝てらつしやいますよ、あすここに陣

どってしまつてね。お邪魔になつちや悪いからな、ですつて。

(懐中時計を出して見て) あのかた、お起しするといいいんですけど、ワルワーラさま(訳注 ワーリヤの正式の名)がいけないと仰おつしやるものですから。お前、あの人を起すんじゃないよ、つて。

ワーリヤ登場、バンドに鍵かぎ束たばをさげている。

ワーリヤ ドウニヤーシャ、コーヒーを早く……。お母さんがコーヒーをご所望だからね。

ドウニヤーシャ はい、ただ今。(退場)

ワーリヤ よかったわ、みんな無事でお着きで。あんたも、やつとまたお家うちね。(優しくいたわりながら)わたしのいい子が帰ってきた！ べつぴんさんが帰ってきた！

アーニヤ ずいぶんつら辛かったわ、わたし。

ワーリヤ 察するわ！

アーニヤ わたしがここを発つたのは、御受難週間(訳注 大齋期の第五週)で、まだ寒いころだったわ。シャルロツタったら途中のべつしやべりどおしで、手品までして見せるの。なんだってあんた、シャルロツタなんか付けてくれたの……

ワーリヤ だって、あんたひとりで旅へ出すわけにも行かないじやないの、アーニヤ。十七やそこらで！

アーニヤ　パリに着いたら、あすこも寒くって、雪だったわ。わたしのフランス語ときたら、凄^{すご}いものでしよう。ママは五階に部屋をとっていてね、わたしがあがって行くと、誰^{だれ}だかフランス人の男だの、女だの、ちっちゃな本をもった年寄りのカトリックの坊さんだのが、つめかけていて、部屋じゆうタバコの煙でいっぱい、そりや厭^{いや}なの。わたし急にママが可^{かわ}哀^{あい}そうになつて、あんまり可^{かわ}哀^{あい}そうだもんだから、ママの頭を抱いて、ぎゅつと両手でしめつけたなり、放^{はな}せないの。ママはそれからいつも甘^{あま}ったれて、泣^ないてばかりいたわ……

ワーリヤ　（涙^{なみだ}ごえで）もういいわ、もう言^いわないで……

アーニヤ　マントン（訳注　南フランス、ニースに近い保養地）

の近くのご自分の別荘も売ってしまったし、ママにはもう、なんにも残っていないの、なんにも。わたしだって一コペイカもなくなくなってしまつて、やつとこさで帰つてきたのよ。だのにママつたら、ちつともわからないの。駅の食堂へはいると一ばん高い料理を注文するし、ボーイのチップは一ルーブリずつなのよ。シャルロットも同じなの、おまけにヤーシヤまでが、ちやんと一人前とるの、見ちやいられないわ。ヤーシヤつて、ほら、ママのボーイよ。それも一緒に連れてきたの……

ワーリヤ 見たわ、いやなやつ。

アーニヤ で、どうなの、その後？ 利子は払えた？

ワーリヤ それどころじゃないわ。

アーニヤ 困るわね、どうしましょう。……

ワーリヤ 八月には、この領地が競売になるわ……

アーニヤ ああ、どうしよう。

ロパーヒン (ドアから覗^{のぞ}いて、牛のなき真似^{まね}をする) モオ・オ

・オ…… (去る)

ワーリヤ (涙^{なみ}ごえで) ええ、こうしてやりたい…… (拳固^{げんこ}でお

どす)

アーニヤ (ワーリヤを抱いて、小声^{ここゑ}で) ワーリヤ、あの人あんな

に申込みをして? (ワーリヤ、否^{いや}というしるしに首を振る)

だってあの人、あなたを愛してるのよ。……おたがい打明けた

らどうなの、何を二人とも待ってるの?

ワリーヤ わたし思うのよ、これは結局どうにもならない話だつて。あの人は仕事が多いから、わたしどころじゃない……見向きもしないのよ。いつそどこかへ行つてしまつてくれるといいんだけど。あの人の顔、見るのがつらいわ。みんな、わたしたちの結婚のうわさをして、お祝いまで言つてくれるけれど、ほんとうは何もありやしない。夢みたいなものなのよ。……（調子をかえて）あんたのブローチ、みつばち蜜蜂に似ているわ。

アーニヤ（悲しそうに）これ、ママが買つてくれたの。（自分の部屋へはいつて、快活な子供っぽい調子で）あたしパリでね、軽気球に乗つたわ！

ワリーヤ わたしのいい子が帰つてきた！ ベっぴんさんが帰つ

てきた！

ドウニヤーシヤは、コーヒー沸かしをもつてすでに戻もどつてきており、コーヒーを煮ている。

ワーリヤ（ドアのそばに立つて）わたしね、アーニヤ、こうして一日じゆう家うちのことであくせくしながらいつも空想しているの。あんたをお金持の人のところへお嫁にやれたら、わたしも安心がいつて淋さびしい僧院にこまれるわ。それからキーエフへ：
：モスクワへと、ずっと聖地めぐりをして暮すの。……聖地から聖地へめぐって行くの。きつと、すばらしいわ！……

アーニヤ お庭で鳥がないている。今なん時？

ワーリヤ とつくに二時は回ったはずよ、もう寝たらいいわ、アーニヤ。
(アーニヤの部屋へはいりながら) きつとすばらしいわ！

ヤーシヤが、膝掛ひざかけと旅行用の信玄袋を持って登場。

ヤーシヤ (舞台を横ぎりながら、いんぎんに) こちらを通つても宜よろしいでしようか？

ドウニヤーシヤ まあ、見ちがえるようだわ、ヤーシヤ。あんた、外国ですっかり立派になつて。

ヤーシャ ふむ。……どなたでしたっけ？

ドウニヤーシャ あんたがここを発つた時は、あたしまだこんな
だったわ……（床からの高さを手で示す）ドウニヤーシャよ、
フョードル・コゾエードフの娘よ。覚えていないのね！

ヤーシャ ふむ。……可愛いキュウリさん！（あたりを見回し、
彼女を抱く。彼女はキャツと叫んで受け皿さひらを落す。ヤーシャす
ばやく退場）

ワーリヤ （ドアの敷居で、不興げな声で）また何かしたの？

ドウニヤーシャ （涙ごえで）お皿を割りました。……

ワーリヤ そりやいい前兆ね。

アーニヤ （自分の部屋から出てきながら）ママに言つとかなく

ちやいけないわ、ペーチャが来ているって……

ワーリヤ わたし、あの人を起さないように言いつけたの。

アーニヤ (考えこんで) 六年まえに、お父さまが亡なくなって、

それから一ひとつき月すると弟のグリーンシャが、川で溺おぼれたんだわ。

可愛い七つの子だったのに。ママは、もう辛しんぼう抱がならなくな

って、出てらしたのだけわ。……あとも振返らずに、出てらした

んだわ。……(身ぶるいする) わたしママの気持よくわかるの、

それがママに通じたらばねえ! (間) あのペーチャ・トロフ

イーモフは、グリーンシャの家庭教師だったんだから、またお思

い出しになるかも知れないわね……

フィールズ登場。セビロに白チヨツキのいでたち。

フィールズ（コーヒー沸かしのところへ行き、心配そうに）奥さまは、こちらで召し上がるとおっしゃる。……（白手袋を両手にはめる）よいかな、コツファイは？（ドウニヤーシヤに向つて、きびしく）これ！ クリームはどうした？

ドウニヤーシヤ あら、どうしましょう……（あたふたと退場）
フィールズ（コーヒー沸かしのまわりをそわそわしながら）ええ、この出来そこねえめが……（ぼそぼそ独り言をいう）パリからお帰りになった。……旦^{だんな}那さまもいつぞや、パリへおいでなすつたっけな……馬車でな……（声を立てて笑う）

ワーリヤ　フィールス、お前なに言ってるの？

フィールス　はい、何と仰せおおで？　（嬉しそうに）奥さまがお帰

りになりました！　お待ち申した甲斐かあつて。これでもう、死

んでも思い残すことはありませんわい。……（嬉し泣きに泣く）

ラネーフスカヤ夫人、ガーエフ、ピーシチク登場。ピーシチ

クは薄いラシヤの袖そでなし胴着に、だぶだぶのズボンをはいて

いる。ガーエフははいつてきながら、両腕と胴とで玉突きを

しているような仕草をする。（訳注　原書には示していない

が、ロパーヒンもこのとき登場するらしい）

ラネーフスカヤ どうするんですしたつけ？ ちよつとおさらいして……。黄玉は隅すみへ！ 空からクツシヨンで真ん中へ！

ガーエフ 薄く当てて隅へだ！ ねえお前、むかしはお前といつしよに、ほれこの子供部屋で寝たもんだが、今じゃわたしも五十一だ、なんだか妙な気もするがなあ……

ロパーヒン さよう、時のたつのは早いものです。

ガーエフ なんだって？

ロパーヒン いや、時のたつのは早い、と言ったので。

ガーエフ この部屋は、虫とり草のにおいがする。

アーニヤ わたし、行って寝るわ。おやすみなさい、ママ。（母

にキスする）

ラネーフスカヤ わたしの可愛い子。(娘の手にキスする) おまえ、うちに帰って嬉しいだろうね？ わたしは、まだほんどのような気がしないの。

アーニヤ おやすみなさい、伯父さま。

ガーエフ (彼女の顔と両手にキスする) ゆっくりおやすみ。なんてお前は、お母さん似なんだろう！ (妹に) ねえリユーバ

(訳注 ラネーフスカヤ夫人の名リユーボーフィの愛称) お前もこの年ごろには、この子そっくりだったよ。

アーニヤは片手をロパーヒンとピーシチクに与え、自分の部屋へ引きとってドアをしめる。

ラネーフスカヤ あの子すっかりくたくたなのね。

ピーシチク 道中がさぞ長かったでしょうからな。

ワリーヤ (ロパーヒンとピーシチクに) どうなすって、皆さん？ やがて三時ですよ、そろそろ紳士の体面をお考えになったらどうでしょう。

ラネーフスカヤ (笑う) お前、相変らずなのね、ワリーヤ。

(彼女を引きよせてキスする) このコーヒーを飲んだら、それでお開きにしましょうね。(フィールス、夫人の足もとに足載せのクッションを置く) ありがとうよ、フィールス。わたし、コーヒーが癖になってね、昼も夜も飲むんですよ。ありがとう、

爺じいや。(フィールスにキスする)

ワリーヤ ちよつと見てこよう、荷物がみんな来ているかどうか。

……(退場)

ラネーフスカヤ ほんとに、ここに坐すわっているのはわたしかしら？ (笑う) わたし飛んで跳ねて、両手を振りまわしたい。

(両手で顔をおおう) これが夢だったらどうしよう！ わたし神かけて、生れ故郷が好きですの、まるで母親に甘えるような気持ですの。わたし汽車の窓から、とても見てはいられなくなつて、泣いてばかりいましたわ。(涙ごえで) それはそうと、コーヒーを頂かなくてはね。ありがとうよ、フィールス、ありがとう、爺や。お前が達者でいてくれて、わたしほんとに嬉し

いよ。

ファイルス おとといでございます。

ガーエフ 耳が遠いんだよ。

ロパーヒン わたしはこれからすぐ、今朝の四時すぎに、ハリコフへ発たなければなりません。じつに残念です！ ちよつとお目にかかつて、お話ししたいこともあつたのですが……。しかし、相変らずご立派ですなあ。

ピーシチク (息をはずませながら) むしろ器量があがられたくらいだ。……お召物もパリ好みでな……。わしらなど、どだい目がくらんで、まともにや拝めんほどですわい……

ロパーヒン あなたのお兄上、このガーエフさんは、わたしのこ

とを下^げ司^すだ、強欲だと言われますが、そんなこと、わたしは一向平気です。なんとでも仰しやるがいい。ただわたしの望むところは、あなただけは元どおりわたしを信用してください、そのえも言われぬ、しみじみしたお眼^めを、従前同様わたしに注いで頂きたいということ。いやはや、思いだしてもゾツとする！ うちの親父^{おやじ}は、あなたのお祖父^{おじい}さんやお父さんの農奴だった。ところがあなたには、ほかならぬあなたという人には、わたしはいつぞや一方ならぬお世話になったことがある、それでわたしは、一切をきれいに忘れて、あなたを肉親のようにお慕いしています……いや、肉親以上です。

ラネーフスカヤ わたし、じつとしちやいられない、とても駄^だ目^め

……（ぱつと立ちあがって、ひどく興奮のいで歩きまわる）

嬉しくって嬉しくって、気がちがいそうだ。……わたしを笑っ

てちようだい、ばかなんですもの。……なつかしい、わたしの

ほんだな
本棚……

（戸棚にキスする）わたしの小っちゃなテーブル……

……

ガーエフ お前の留守のまに、ばあや乳母が死んだよ。

ラネーフスカヤ （腰をおろし、コーヒーを飲む）ええ、天国に

やすらわんことを。知らせをもらいました。

ガーエフ それに、アナスターシイも死んだ。やぶにらみのペト

ルーシカは、うちから暇をとって、今じゃ町の署長のところに

いる。（ポケットから氷砂糖の小箱を取りだし、しゃぶる）

ピーシチク わしの娘のダーシエンカが……よろしくと申しました……

ロパーヒン わたしはあなたに、何かとても愉快な、楽しい話が見たいのですが……（時計を出して見る）そろそろ発たなければならぬので、おしやべりをしているひまがありません……でまあ、ごくかいつまんで申しあげます。すでにご承知のとおり、お宅の桜の園は借財のカタで売りに出ておりました、八月の二十二日が競売の日になっています。しかし、ご心配はいりません、奥さん、どうぞ、ご安心ねがいたい、打つ手はあります。……そこでわたしの案をよく聴いていただきたいのですが！

あなたの領地は、町からわずか五里のところにあつて、しかも

ついそばを鉄道が開通しました。でもし、この桜の園と川沿いの土地一帯を、別荘向きの地所に分割して、それを別荘人種に貸すとしたら、あなたはいくら内輪に見積^{ねん}つても、年に二万五千の収入をおあげになれるわけです。

ガーエフ 失礼だが、つまらん話だな！

ラネーフスカヤ あなたのお話、どうもよくわからないわ、ロパーヒンさん。

ロパーヒン つまり別荘人種から、三千坪に対して最低年二十五ルーブリの割で、地代をとり立てられるわけです。もし今すぐに広告なされば、このわたしが保証しますが、秋になるまでには一っかけらの空地も残さず、みんな借り手がつきますよ。早

い話が万歳です、お家ご安泰というわけです。何しろ場所からは絶好だし、川は深いし。ただ、もちろん、そこらをちよつと掃除したり、片づけたりはしなければなりません……例えばまあ、古い建物はみんな取払ってしまう。さしずめこの屋敷なんか、もうなんの役にも立ちませんからね。それに、古い桜の園なんかも伐り払ってしまう……

ラネーフスカヤ 伐り払うですって？ まああなた、なんにもご存じないのねえ。この県のうちで、何かしらちつとは増しな、それどころかすばらしいものがあるとすれば、それはうちの桜の園だけですよ。

ロパーヒン そのすばらしいというのも、結局はだだっぴろいだ

けの話です。桜んぼは二年に一度なるだけだし、それだって、やり場がないじゃありませんか。誰ひとり買手がないのでね。

ガーエフ 『百科事典』にだって、この庭のことは出ている。

ロパーヒン （時計をのぞいて）これといった思案も浮ばず、なんの結論も出ないとなると、八月の二十二日には、桜の園はむろんのこと、領地すっかり、競売に出してしまうのですよ。思いつきりが肝腎かんじんです！ ほかに打つ手はありません、ほんとうです。ないとなったら、ないのですから。

フィールス 昔は、さよう四、五十年まえには、桜んぼを乾ほして、砂糖づけにしたり、酢につけたり、ジャムに煮たりしたものだ。それから、よく……

ガーエフ 黙っている、フィールス。

フィールス それからよく、乾した桜んぼを、荷馬車に何台も積んで、モスクワやハリコフへ出したもんでござんしたよ。大したお金でしたわい！ 乾した桜んぼだつて、あの頃はころ柔らかくてな、汁しるけ気があつて、甘味があつて、よい香りでしたよ。……あの頃は、こさえ方を知っていたのでな……

ラネーフスカヤ そのこさえ方が、今どうなつたの？

フィールス 忘れちまいましたので。誰だれも覚えちやおりません。

ピーシチク (ラネーフスカヤ夫人に) パリはいかがでした？

ええ？ かえる蛙をあげりましたか？

ラネーフスカヤ ワニを食べましたよ。

ピーシチク　こりや、どうだ……

ロパーヒン　今まで田舎といえば、地主と百姓しかいませんでしたが、こんにち今日では別荘人種というものが現われています。どんな町でも、どんな小つぼけな町でも、ぐるり一めん別荘が建っています。このぶんでいくと、二十年もしたら、別荘人種はどえらい数になるでしょう。今でこそあの連中は、バルコンでお茶を飲むのがせいぜいですが、あに凶らんややがては、あの連中もめいめい三千坪の地面で、農作をはじめるかも知れない。そのあかつきには、お宅の桜の園も、豪勢な、ゆたかな、地上の天国になるでしょう。

ガーエフ　（憤慨して）じつにくだらん！

ワーリヤ、ヤーシヤ登場。

ワーリヤ お母さま、電報が二通きていましたわ。（かぎたば鍵束をよ
り分けて、音たかく古風な本棚をあける）ほら、これ。

ラネーフスカヤ パリからね。（ろくに読まずに、二通とも引裂
く）パリとは、もう縁きりだわ……

ガーエフ ねえリユーバ、知ってるかい、この本棚の歳をとしささ？

ついこないだ、一ばん下の引出しを抜いて見たらばね、焼印で
年号が押してあるんだ。ちようど百年まえにできたんだよ。ど
うだい、ええ？ さしずめ記念祭でももよおしたいところだよ。

いくら命のないものにしろ、とにかくなんと言ったって、本棚にはちがいないんだからね。

ピーシチク　（びっくりして）百年……。こりや、どうだ！　：

：

ガーエフ　そう。大したもんさ。……。　（戸棚にさわってみて）親愛にして尊敬すべき戸棚よ！　今や百年以上にわたって、絶えず善と正義の輝かしい理想をめざして進んできた、君の存在に挨拶あいさつを送る。みのり多き仕事へと招く君の無言の呼び声は、百年のあいだたゆむことなく、よく（涙ごえで）わが一家代々の人びとに、未来への勇氣と信念を保持せしめ、われわれのうち、善と社会的自覚の理想を涵養かんようしてくれた。　（間）

ロパーヒン なるほど……

ラネーフスカヤ あなた相変らずねえ、兄さん。

ガーエフ (いささか照れて) 右へ押しして隅へ！ 薄く当てて真

ん中へスポリ！

ロパーヒン (時計を出して見て) どれ、行かなくては。

ヤーシヤ (ラネーフスカヤ夫人に薬をさし出す) いかがでござ

います、丸薬をただ今召し上がったは……

ピーシチク 薬剤なんぞ、のむことはありませんよ、奥さん……

毒にも薬にもなりやしませんや。……まあひとつ……こつちへ

およこしなさい。(丸薬を受けとり、手の平へあけて、ふつと

吹いて口へほうりこみ、クワスでのみくだす) この通り！

ラネーフスカヤ（あきれて）まああなた、気でもちがったの？
ピーシチク 丸薬をすっかり頂きました。

ロパーヒン なんて大食おおぐらいだ！（一同わらう）

フィールス このかたは、復活祭の時おいでになって、キユウリ
を半たる召し上がりましたよ……（ぶつぶつつぶや呟く）

ラネーフスカヤ 何を言ってるのかしら？

ワリーヤ もう三年ごし、あんなふうにぶつぶつ言ってますの。

わたしたち、馴なれてしまいました。

ヤーシヤ ご老体ですからな。

シャルロツタが白い服をきて、舞台をよこぎる。すこぶる瘦や

せた体を、ぎゅつと緊めあげるような着こなしで、バンドに柄つき眼鏡をさげている。

ロパーヒン どうも失礼、シャルロットさん、まだご挨拶をしませんでしたね。（彼女の手にキスしようとする）

シャルロット （手を引っこめながら）あなたに手をキスさせた
ら、次には肘ひじとおいでなさるでしょうよ、それから肩とね……

ロパーヒン どうも運が悪い、今日は。（一同わらう）シャルロ
ットさん、手品を見せてくださいよ！

ラネーフスカヤ ほんとにシャルロット、手品を見せてちょうだ
い！

シャルロット　だめです。わたし眠いんですから。（退場）

ロパーヒン　三週間したらお目にかかります。（ラネーフスカヤ夫人の手にキスする）ではそれまで、ご機嫌きげんよう。もう時間です。（ガーエフに）ではまた。（ピーシチクとキスをかわして）さようなら。（まずワーリヤと、ついでフィールス、ヤーシヤと握手して）発ちたくないなあ。（ラネーフスカヤ夫人に）別荘の件をとっくりお考えになって、決心がおつきでしたら、ちよつとお知らせを願います。五万ルーブリは作って差しあげます。慎重にお考えください。

ワーリヤ　（腹だたしく）さ、いい加減でいらつしやいよ！

ロパーヒン　行きます、行きますよ……（退場）

ガーエフ 下司め。いやこれは、ごめん《パルドン》。……ワーリヤはあの男のところへ嫁くんだっけな、あれはワーリヤのムコさんだ。

ワーリヤ おじさん、余計なこと言わないで。

ラネーフスカヤ なによ、ワーリヤ、わたしそうなたら本当に嬉しい。あれは、いい人だもの。

ピーシチク 人物は、じつになんともはや……よくできた人で……
……うちのダーシエンカも……やっぱりその、言っておりますよ……何やかやとな。（いびきをかいて、すぐまた目をさます）
いや、それにしても奥さん……恐縮ですが貸してくださいませんか……二百四十ルーブリだけ……あす担保の利子を払わにやなら

るので……

ワーリヤ（仰天して）だめよ、だめですよ！

ラネーフスカヤ わたし、ほんとに一文もないのよ。

ピーシチク なあに出てきますよ。（笑う）決して希望は捨てま

せて。いつぞやも、いよいよ駄目だ、これで破滅だと観念し

たら、いや驚くまいことか、——鉄道がうちの地面を通つてね

……金がころげこみましたよ。まあ見ててご覧なさい、また何

かありますよ、今日でないまでも明日あすはね。ダーシエンカが二

十万あてますよ……あれは富クジを一枚もつてますでな。

ラネーフスカヤ コーヒーも飲んだから、これでもう休めるわ。

フィールス（ブラシでガーエフの服を払いながら、訓戒口調で）

またズボンをお間違えになった。ほんとに困ったお人だ！

ワーリヤ（小声で）アーニヤは寝ているわ。（そつと窓をあげる）もう日が出た、寒くないわ。ご覧なさい、お母さん、なんて見事な桜の木でしょう！ すばらしいわ、この空気！ ムク鳥が啼ないている！

ガーエフ（べつの窓をあける）庭いちめん真つ白だ。おまえ忘れやしないだろう、え、リユーバ？ この長い並木は、ずっとまっすぐ、まるで革帯をぴんと張ったように伸びて、月夜には白々と光るのだ。ね、覚えてるだろう？ 忘れはしまいね？

ラネーフスカヤ（窓から庭を眺ながめて）ああ、わたしの子供のころ、清らかな時代！ わたし、この子供部屋に寝て、ここから

庭を眺めたものよ。あの頃は幸福が、毎朝わたしと一しよに目をさましたつけ。庭もこの通りだった、そつくりそのまま。

（嬉しさのあまり笑う）真つ白、一めんに真つ白ね！ ああ、わたしの庭！ 暗い、うつとうしい秋や、寒い冬を越して、またお前は若々しく、幸福で一ぱいだわ。天使たちが、お前を見すてなかつたのね。……ああ、わたしの胸や肩から、この重石おもしがとりのけられたら！ わたしの過去を、きれいに忘れることができたら！

ガーエフ そう、だがこの庭も、借金のカタに売られてしまう。妙な話だが、仕方がない……

ラネーフスカヤ あら、ご覧なさい、亡なくなつたお母さまが、庭

を歩いてらっしやるわ……白い服を召して！
（嬉しさのあま

り笑う）たしかにそうだわ。

ガーエフ どれ、どこに？

ワリーヤ しっかりなすって、お母さん。

ラネーフスカヤ 誰もいない、気のせいだったわ。右手の、あず
まやへ行く曲り角に、白い若木の垂れているのが、女の影に似
てたんだわ……

トロフィーモフ登場。着ふるした学生服をきて、眼鏡をかけ
ている。

ラネーフスカヤ　ほんとにすばらしい庭！　花が真つ白にかさな

つて、あの青い空……

トロフィーモフ　奥さん！　（夫人は彼をふりかえる）僕はちよ
つとご挨拶だけして、すぐ引きさがります。（熱烈に手にキス
する）朝まで待つように言われたんですが、とても我慢がなら
ないもんで……

ラネーフスカヤ夫人、けげんそうに彼を見る。

ワリーヤ　（涙ごえで）ペーチャ・トロフィーモフよ……

トロフィーモフ　ペーチャ・トロフィーモフ、お宅のグリーンシャ

の家庭教師でした。……僕そんなに変ったでしようか？

夫人は彼を抱いて、静かに泣く。

ガーエフ（当惑して）もういい、もういいよ、リユーバ。

ワーリヤ（泣く）だから言ったじゃないの、ペーチャ、あしたまでお待ちなさいって。

ラネーフスカヤ わたしのグリーシャ……ああ坊や……グリーシ

ヤ……可愛い子……

ワーリヤ 仕方がないわ、お母さん。神さまの思召おぼしめしですもの。
トロフィーモフ（やさしく、涙ごえで）いいですよ、もういい

ですよ……

ラネーフスカヤ（静かに泣く）あの子は死んだ、溺おぼれてしまつた。……なぜなの？　なぜでしょう、あなた？　（声をひそめて）あすこでアーニヤが寝ているのに、わたし大きな声して……うるさいわね。……まあ、どうなすつたの、ペーチャ？　どうしてそんなに風采ふうさいが落ちたの？　なんだってそう老ふけなすつたの？

トロフィーモフ　汽車のなかでも、どつかの百姓ぼあ婆ばあさんに、
“え、禿はげの旦那だんな”　って言われました。

ラネーフスカヤ　あなたはあのころ、まるで子供で、可愛い学生だったわ。それが今じゃ、髪の毛も濃くはないし、眼鏡まで。

ほんとに、今でも大学生なの？（ドアのほうへ行く）

トロフィーモフ きつと僕は、万年大学生でしょうよ。

ラネーフスカヤ（兄に、それからワリーヤにキスする）さあ、
行っておやすみなさい。……あなたも老けたわねえ、レオニー
ド。

ピーシチク（夫人のあとにつづく）では、これでおねんねか。

……ええ、この足痛風めが。今日は泊めていただきますよ。……
……とにかくわしは、ねえ奥さん、あすの朝にや……二百四十ル
ーブリというものが……

ガーエフ あいつ、自分のことばかりだ。

ピーシチク 二百四十ルーブリ……担保の利子を払うんでね。

ラネーフスカヤ　お金なんかありませんよ、わたし……

ピーシチク　返しますからさ、奥さん。……わずかな金高じゃありませんか……

ラネーフスカヤ　じやいいわ、レオニードにたのみましょう。……出してあげて、レオニード。

ガーエフ　よし、出してやろう。ポケットをあけて待つてるかい。

ラネーフスカヤ　仕方がないじやないの、出したげなさいよ。……この人いるんだから……。返すと言うんだし。

ラネーフスカヤ夫人、トロフィーモフ、ピーシチク、フィー

ルス退場。ガーエフ、ワーリヤ、ヤーシヤ残る。

ガーエフ 妹は、まだ金をばらまく癖が直らん。 (ヤーシヤに)
いい子だから、もう少しあっちい行つてくれ。お前はニワトリ臭
くてかなわん。

ヤーシヤ (冷笑をうかべて) そういう旦那は、相変らずでらつ
しやるね。

ガーエフ なに? (ワーリヤに) こいつ、なんと言つたのかね。
ワーリヤ (ヤーシヤに) お前のおつ母さんが村から出て来て、
きのうから下の部屋しもで待つてるよ、ちよつと会いたいつて……
ヤーシヤ ちえつ、うるさいったらありやしねえ!

ワーリヤ　まあ、いけずうずう々々しい！

ヤーシヤ　余計なこつた。あすでも来りやいいのにさ。（退場）

ワーリヤ　お母さんは相変らずで、ちつともお変りにならない。

勝手にさせておいたら、何もかも人にやってしまうわ。

ガーエフ　そうさ……（間）何かの病気にたいして、あれもこれ

もと、いろんな薬をすすめるような時は、つまりその病気が不

治だというわけだ。わたしも、脳みそをしぼって考えてるんだ

が、するといろんな手が浮ぶね。あんまり沢山あるもんで、つ

まり本当のところは、一つもないということになる。誰かの遺

産がころげこめばよし、アーニヤを大金持のところへ嫁にやる

のもよし、それともヤロスラーヴリへ出かけて行って、

伯はくしや

爵^く夫人の伯母さんにぶつかってみるのも悪くはあるまい。伯母

さんは、とてもどえらい金持だからな。

ワリーヤ (泣く) どうぞそうなればねえ。

ガーエフ 泣かないでもいい。伯母さんはとても金持なんだが、

われわれ^{きょうだい}兄^い妹^いがお好きじゃない。だいいち妹が、貴族でも

ない弁護士^{ふせい}風情^いにとついだものでな……

アーニヤがドアのところ^{ところ}に現^まわれる。

ガーエフ 貴族でもない男と結婚した上に、行状も大いに宜^{よろ}しかつたとは言えないからな。あれは立派な女だ。氣立てもいいし、

親切だ。わたしは大好きなんだが、それにしたって、いくらヒイキ目に見たところで、やはり不身持ちなことだけは認めないわけには行かん。こいつは、ちよつとした身ぶり一つにも出ているよ。

ワーリヤ　（ひそひそ声で）アーニヤがドアのところにありますよ。
ガーエフ　なんだって？　（間）おや、おかしい、何か右の眼めにはいった……よく見えないぞ。それで木曜にね、地方裁判所へ行ったら……

アーニヤはいつてくる。

ワーリヤ どうして寝ないの、アーニヤ？

アーニヤ 寝られないの。だめなの。

ガーエフ 可愛い子。(アーニヤの顔や手にキスする) わたしの

子…… (涙ごえで) お前は姪めいどころじゃない、わたしのエンジ

エルだ、わたしの一切だ。信じておくれ、わたしを、ほんとだ

よ……

アーニヤ 信じてますわ、伯父さん。みんなあなたが好きで、尊

敬しています……でもねえ、伯父さん、あなたは黙ってらっし

やらなけりやいけないわ、ただじつと黙ってね。今しがたも、

わたしのママのことを、なんて言ってらしたの？ ご自分の妹

じゃありませんか？ なんだって、あんなことを仰おっしやるの？

ガーエフ　なるほど、なるほど……（彼女の片手で自分の顔をおおう）まったく、厭いやになるよ！　いやどうも、情けないこつた！　おまけに先刻さつきは、本棚ほんだなの前で演説をした……ばかばかしい！　済んでからやつと、ばかげていることがわかつたんだ。ワーリヤ　ほんとよ、伯父さん、黙ってらつしやるに限るわ。黙っていれば、それでいいのよ。

アーニヤ　黙ってらつしやれば、ご自分だつて気が休まるわ。

ガーエフ　黙るよ。（アーニヤとワーリヤの手にキスする）黙るよ。ただ、ちよつと大事な話があるんだ、木曜に地方裁判所へ行つたら、偶然、仲間が寄り合つちまつてね、あれやこれやと四方山よもやまばなしが出たなかで、どうやらその、手形で金を借りて、

銀行の利子が払えそうなんだ。

ワーリヤ どうぞそうなればねえ！

ガーエフ 火曜日に出かけていって、もう一度話してみよう。

(ワーリヤに) 泣かないでもいい。(アーニヤに) ママさんは
ロパーヒンに相談するだろうさ。あの男は、もちろん、いやと
は言うまい。……それからお前は、ひと休みしたら、ヤロスラ
ーヴリの伯爵夫人のところへ行ってみるんだな、お前のお伯母
さんだからね。といった工合に、三方から運動すれば——もう
こつちのものだ。利子は払えるさ、断じてね。……(氷砂糖を
口へ入れる) わたしの面目なりなんなり、なんでもかけて誓う
が、この領地は売られるものかね！ (興奮して) ぼくの幸福

にかけて誓う！ さあ、この手が証人だ（片手を相手に差出す）
——もしこの僕が、ずるずる競売へまで持ちこませたら、その
時こそ僕を、やくざとでも恥しらずとでも言うがいい！ ぼく
の全存在にかけて誓うよ！

アーニヤ （気持の落ちつきが戻^{もど}ってきて、彼女は幸福だ）あな
たは、なんていい人でしょう、伯父さま、なんて利口な！

（伯父を抱く）やっと安心したわ！ わたし安心して、とても
幸福！

フィールス登場。

フィールズ (咎^{とが}めるように) 旦那さま、ばちが当りますぞ！

いつおやすみになりますので？

ガーエフ ああ今、すぐだよ。お前はさがつていい、フィールズ。

なあに、こうなりやもう、わたしは一人で着かえるよ。じゃ子供たち、お寝んねだよ。……詳しい話は明日の^{あす}こととして、も

う行つて寝なさい。(アーニヤとワーリヤにキスする) わたし

は八〇年代(訳注 一八八〇年代。ナロードニキー運動の退潮

期)の人間だ。……なるほど評判のわるい時代じゃあるが、そ

れにしたつて、こうは言えるな——信念のため僕だつて、少な

からぬ苦痛をなめてきたもんだとね。百姓が僕を好いてくれる

のも、まんざら不思議はない。農民を知らなくてはいかん！

そもそも彼らが、いかなる……

アーニヤ また、伯父さま！

ワーリヤ 伯父さん、黙ってらっしゃい。

フィールス (腹だたしげに) 旦那さま！

ガーエフ 行くよ、行くよ。……二人とも寝なさいよ。トウ・

クツションで真ん中へ！ みごとなやつをな…… (退場。フィ

ールスちよこちよこと後にしたかう)

アーニヤ これで安心だわ。ヤロスラーヴリへなんか、わたし行

きたくない。あのおばあさま、嫌きらいなんだから。でも、とにかく

くホツとしたわ。ありがとう、伯父さま。(腰かける)

ワーリヤ もう寝なくっちゃ。どれ行きましょう。そうそう、あ

んたの留守のまに、厭なことがあったの。あの古いほうの下部しも屋には、あんたも知つてのとおり、古手の召使ばかりいるでしょう、——エフィーミュシカだの、ポーリヤだの、エフスチーグネイだの、カールプだのつて。あの連中、どこかの浮浪人どもを引っぱりこんで泊めだしたのよ。わたし黙っていてやった。そこへ耳にはいったんだけど、わたしがあの連中にエンドウ豆ばかり食べさせるような、そんな噂うわさを飛ばしてるの。しわん坊だから、ですつてさ。……それがみんな、エフスチーグネイの仕業なの。……「よし、そんならこつちも覚悟がある」と、わたしは思つてね、エフスチーグネイを呼びつけた……（あくびをする）するとやって来たから……「なんてお前は、ええエフ

スチーグネイ……馬鹿ばかなんだい」って言つてね……（アーニヤを見て）アーニチカ！……（間）寝ちまつた。……（アーニヤの腕をかかえて）さ、ベッドへ行きましょう。……さ、行くのよ！……（連れて行く）わたしのいい子がおねんねだ！ さ、行きましょう……（ふたり行く）

はるか庭の彼方かなたで、牧夫が芦笛あしぶえを吹く。トロフィーモフが舞台を通りかかり、ワーリヤとアーニヤを見て、立ちどまる。

ワーリヤ しッ……このひと寝てるのよ。……寝てるのよ。さあ
行きましょうね、可愛い子。

アーニヤ （小声で、夢見ごこちで）とてもくたびれたわ、わたし……まだ馬車の鈴の音がしてるわ。……伯父さま……いい人ね、ママも、伯父さまも……

ワーリヤ 行きましょう、アーニチカ、行きましょうね……（アーニヤの部屋へはいる）

トロフィーモフ （感きわまつて）おお、ぼくの太陽！ ぼくの青春！

——幕——

第二幕

野外。とうに見すてられ、傾きかかった古い小さな礼拝堂がある。そのそばに井戸。もとは墓標であつたとおぼしい大きな石が幾つか。古びたベンチが一つ。ガーエフの田舎屋敷へ通じる道が見える。片側に、高くそびえたポプラが黒ずんでいる。そこから桜の園がはじまるのだ。遠景に電信柱の列。さらに遥か遠く地平線上に、大きな都会のすがたがぼんやり見える。それは、よつぽど晴れわたった上天気でないと思えないのだ。まもなく日の沈む時刻。

シャルロット、ヤーシャ、ドウニヤーシャが、ベンチにかけ
ている。エピホードフはそばに立って、ギターを弾いている。
みんな思い沈んで坐^{すわ}っている。シャルロットは古いヒサシ帽
をかぶり、肩から銃をおろして、革ひもの留金をなおしにか
かる。

シャルロット （思案のていで）わたし、正式のパスポートがな
いもので、自分が幾つなのか知らないの。それでいつも若いよ
うな気がしているわ。まだ小娘だったころ、お父つあんとおつ
母さんは市^{いち}から市^{いち}へ渡り歩いては、見世物を出していたの、な

かなか立派なものだった。わたしはサルト・ホルターレとんぼがえりをやったり、いろんな芸当をやったものよ。お父つあんもおつ母さんも死んでしまうと、あるドイツ人の奥さんがわたしを引取って、勉強させてくれた。そう。やがて大きくなって、家庭教師になった。だが一たい自分が、どこの何者なのか——さっぱり知らないの。……両親がどういう人だったか、正式の夫婦だったかどうか……それも知らない。(ポケットからキュウリを出してかじる) なんにも知らないわ。(間) いろいろ話もしたいけれど、話相手もなし……。わたしには誰もだれいないんだもの。

エピホードフ (ギターを弾きながら歌う)

浮世を捨てしこの身には

友もかたきも何かせん……

マンドリンを弾くのは、いいもんだなあ！

ドウニヤーシャ それはギターよ、マンドリンじゃないわ。(ふ

ところ鏡を見ながら白粉おしろいをはたく)

エピソードフ 恋に狂った男にとつちや、これもマンドリンさね。

……(口ずさむ)

たがいの恋の炎もて

胸もえ立ちてあるならば……

ヤーシャ、声をあわせる。

シャルロット　すごい歌い方だこと、この人たち……ふツ！　山
犬みたいだ。

ドウニヤーシャ　（ヤーシャに）それにしても、外国へ行くなんて、ほんとにいいわねえ。

ヤーシャ　そりや、もちろんさ。あえて異論は唱えませんねえ。

（あくびをして、葉巻を吸いはじめる）

エピソード　わかりきった事さ。外国じゃ総すべてが、とうの昔に完全なコンプリート（訳注　原語は Complexion に当る外来語で「体格」の意味。それを「完成」の意味に使っているおかし味。以下エピソードの半可通ぶりは続出する）に達してますからね。

ヤーシャ　もちろんね。

エピソード　僕は進歩した人間で、いろんな立派な本を読んで
いるが、それでいてどうしても会得えとくできないのは、結局ぼくが何
を欲するほつか、つまりその傾向なんですよ——生くべきか、それ
とも自殺すべきか、つまり結局それなんだが、にもかかわらず
僕は、ピストルは常に携帯していますよ。そらね……（ピスト
ルを出して見せる）

シャルロット　やつと済んだ。どれ行こうかな。（銃を肩にかけ
る）ねえエピソード、あんたは大そう頭のいい、大そうおっ
かない人だことねえ。さだめし女の子が、夢中になって惚ほれこ
むだろうさ。ブルルル！（行きかける）才子とか才物とかい

った手合いは、みんなこうしたお馬鹿さんばかりさ。話相手なんか誰もいやしない。……しよつちゆう独り、独りぼつち、わたしにや誰もいないのさ……そういう私が何者か、なんで生れてきたのか、それもわかったものじゃない……（ゆつくり退場）

エピソード　つまり結局ですな、ほかの問題はさておいて、自分一個のことに関するかぎり、ともあれ僕はつぎのごとく言わざるを得んですよ——運命が僕を遇することの無慈悲残忍なる、あらしが小舟をもてあそぶに異ならん、とね。かりに一步をゆずつて、この僕の考えが間違つているとすれば、では一体なぜ、今朝ぼくが目をさましてみると、まあ一例として言えばですな、おつそろしく大きな蜘蛛くもが、僕の胸のうえに乗つかつ

ていたんでしよう。……こんなやつがね（両手で示す）。同様にして、クワスでノドをうるおそうと思つて手にとると、またしても、いやはや、たとえば油虫といったたぐいの、極度に無札千万なやつがはいっている。（間）あんたはバツクル（訳注 十九世紀イギリスの文明史家）を読んだことがありますか？

（間）じつはね、ドウニヤーシャさん、ほんの二言三言、御意を得たいことがあるんですがね。

ドウニヤーシャ どうぞ。

エピホードフ それが実は、さし向いでお願いしたいんですが：

：（ため息をつく）

ドウニヤーシャ（当惑して）そう、いいわ……でもその前に、

わたしの長外套がいとうを持ってきてくださらない。……洋服筆筒ようふくだんすの

そばにあるわ。……すこし、じめじめしてきた……

エピソードフ いや、かしこまりました……持って参りましょう。
……さあこれで、このピストルをどうしたらいいか、やつとわ
かったぞ。……（ギターを取りあげ、軽く弾きながら退場）

ヤーシャ 二十二の不仕合せか！ ばかなやつだよ、ここだけの
話だが。（あくび）

ドウニヤーシャ ピストル自殺なんかされたら困るわねえ。（間）
あたし、このごろ落ちつきがなくなつて、しよつちゆう胸さわ
ぎがするの。ほんの小娘のころから、お屋敷へあがつたもんだ
から、今じゃしもじもの暮しを忘れてしまつて、手だつてほら

こんな面白くて、まるでお嬢さんみたい。気持まで華奢きゃしゃになつて、そりやデリケートで、上品で、なんにでもびくびくするの。……とつても怖いのよ。だからヤーシャ、もしもあんたに裏切られでもしたら、あたし神経がどうかなくなってしまふことよ。

ヤーシャ (キスしてやつて) 可愛いかわいキュウリさん! もちろん娘というものは、自分を忘れたらおしまいだ。だから僕が何より嫌きらいなのは、身もちのわるい娘さんさ。

ドウニヤーシャ あたし、あんたが大好き。教養があつて、どんな理屈だつてわかるんだもの。(間)

ヤーシャ (あくびをして) そうさな。……僕に言わせりや、こ
うさ——娘さんが誰かを好きになつたら、つまりふしだらなん

だな。(間)きれいな空気のなかで、葉巻をふかすのはいい気持だなあ。……(きき耳を立てて)誰か来るぞ。……ありや奥さんがただ……

ドウニヤーシヤは、いきなり彼を抱擁する。

ヤーシヤ　うちへ帰りなさい、川へ水浴びに行つたような顔をして、こつちの小徑こみちから行きたまえ。うっかり出くわそうもんなら、僕がさも君と逢あひびき引してたように思われるからな。そいつはたまらんからなあ。

ドウニヤーシヤ　(そつと咳せきをする)葉巻のけむで、あたし頭痛

がしてきたわ。……（退場）

ヤーシヤは居残つて、礼拝堂のそばに坐る。ラネーフスカヤ夫人、ガーエフ、ロパーヒン登場。

ロパーヒン 最後の肚はらをきめて頂きたいですな、——時は待つちやくれません。問題はなんにもありやしない。この土地を別荘地として出すのに、ご賛成かどうか？ 否いやか応か、一こと返事してくださればいいんです。たった一言！

ラネーフスカヤ 誰だろう、ここで嫌いやらしい葉巻をふかすのは！

（腰をおろす）

ガーエフ 鉄道が敷けてから、便利になったものさ。(腰をおろす) こうして町へ出かけて、ひる飯をやつてこられるんだからな……黄玉は真ん中へ！ 何はともあれ家うちへ行つて、一勝負やりたいもんだが……

ラネーフスカヤ まだ大丈夫ですよ。

ロパーヒン ね、ほんの一言！ (哀願するように) ねえ、どう

かお返事を！

ガーエフ (あくびまじりに) なんだね、そりや？

ラネーフスカヤ (巾きんちやく着をのぞいて) 昨日はお金ずいぶん沢

山あったのに、今日はからつきしないわ。ワーリヤは可哀かわいそうに、なんとか切りつめようとして、わたしたちにはミルクのス

ープを出し、勝手もとじや年寄り連中にエンドウ豆ばかり食べさせてるというのに、わたしは何やら訳もわからない無駄むだづかいをしている。……（巾着をとり落す。金貨がばらばらこぼれる）あら、こぼれちまった……（無念の思い入れ）

ヤーシヤ ご免ください、ただ今ひろって差上げます。（金貨をひろう）

ラネーフスカヤ ご苦労さん、ヤーシヤ。それにわたし、なんだってお午ひるなんか食べ物に行つたんだらう。……あなたご推奨のあのちやちなレストラン。音楽つきだかなんだか知らないけれど、テーブル・クロスがシャボンくさかつたわ。……おまけに、なぜあんなに沢山のむことがあるの、ええリヨーニヤ？ なぜ、

あんなにどっさり食べたり、しゃべり散らしたりすることがあるの？ 今日もあのレストランで、あんたは散々またおしゃべりをして、それがみんな、とんちんかんだったじゃないの。七〇年代（訳注 一八七〇年代。ナロードニキー運動の全盛時代）がどうしたの、デカダンがどうのつて。しかも相手は誰だったの？ 給仕をつかまえて、デカダン論をなさるなんて！

ロパーヒン なるほど。

ガーエフ （片手を振って）わたしのあの癖は、とても直らんよ。とても駄目だ……（癩かんしゃく 癩しゃく まぎれにヤーシヤに）なんといい奴だ、しよつちゆう人の前をちらちらしおつて……

ヤーシヤ （笑う）わたしや、旦那だんなの声をきくと、つい笑いたく

なるんで。

ガーエフ (妹に) わたしが出てくか、それともこいつが……

ラネーフスカヤ あっちへおいで、ヤーシヤ、さ早く……

ヤーシヤ (ラネーフスカヤ夫人に巾着をわたす) ただ今まいります。(やつと嘖きだすのをこらえて) はい、ただ今…… (退

場)

ロパーヒン お宅の領地は、金満家のデリガーノフが買おうとしていませう。競売当日は、大将自身が出馬するという話です。

ラネーフスカヤ どこでお聞きになつて?

ロパーヒン 町で、もつぱらの評判です。

ガーエフ ヤロスラーヴリの伯母さんから、送つてよこす約束な

んだが、いつ幾ら送つてくれるつもりか、それがわからん……
ロパーヒン 幾ら送つてよこされるでしょうか？ 十万？ そ
れとも二十万？

ラネーフスカヤ そうね……一万か——せいぜい一万五千、それ
で恩にきせられて。

ロパーヒン 失礼ですが、あなたがたのような無分別な、世事に
うとい、奇怪千万な人間にや、まだお目にかかったことがあり
ません。ちゃんとロシア語で、お宅の領地が売りに出ていると
申しあげているのに、どうもおわかりにならんようだ。

ラネーフスカヤ 一体どうしろと仰おっしやるの？ 教えてちようだ
い、どうすればいいの？

ロパーヒン　だから毎日、お教えしてるじゃありませんか。毎日毎日、ひとつ事ばかり申しあげていますよ。桜の園も、宅地も何も、別荘地として貸しに出さなければならん、それを今すぐ、一刻も早くしなければならん、——競売はつい鼻の先へ迫っている、とね！　いいですか！　別荘にするという最後の肚をきめさえすれば、金は幾らでも出す人があります、それであなたがたは安泰なんです。

ラネーフスカヤ　別荘、別荘客——俗悪だわねえ、失礼だけど。ガーエフ　わたしも全然同感だ。

ロパーヒン　わたしはワアツと泣きだすか、どなりだすか、それとも卒倒するかだ。とても堪^{たま}らん！　あなたがたのおかげで、

くたくたです！（ガーエフに）あなたは婆あだ、まるで！

ガーエフ　なんとね？

ロパーヒン　婆あですよ！（行こうとする）

ラネーフスカヤ　（おびえて）いいえ、行かないでちょうだい。

ここにいて、ねえ。後生だから。何か考えつくかもしれないもの！

ロパーヒン　今さら、なんの考えることが！

ラネーフスカヤ　行かないで、お願い。あなたがいると、とにかく気がまぎれるわ。……（間）わたし、しよつちゆう、何かあるような気がしているの——今にもわたしたちの頭の上に、家がどさりと崩れてきでもしそうな。

ガーエフ （沈思のていで）空クツションで隅^{すみ}へ。……ひねって

真ん中へ……

ラネーフスカヤ わたしたち、神さまの前に、あんまり罪を作りすぎたのよ……

ロパーヒン なんです、罪だなんて……

ガーエフ （氷砂糖を口に入れて）世間じゃ、わたしが全財産を、氷砂糖でしゃぶりつくしたと言っているよ……（笑う）

ラネーフスカヤ ああ、わたし罪ぶかい女だわ。……まるで気がいみたいに、方図もなくお金を使いまわす癖がある上に、借金するほか能のない男にとついだんです。その夫は、シャンパンがもとで死にました——お酒に目のない人でしたからね。そ

のうえまた不幸なことに、わたしはほかの男を恋して、一緒になつたの。すると、ちようどその時、——これが最初の天罰で、真つ向からぐさりと来たのが、——ほら、あすこの川で……坊やが溺れ死んだことでした。そこでわたしは、外国へ発つたの。発ちつぱなしで、もう二度と歸つてはこまい、あの川も見まい、とおもつてね。……わたしが眼をつぶつて、無我夢中で逃げだしたのに、あの人は追っかけてきたの……情けも容赦もなくね。わたしがマントンの近くに別荘を買つたのも、あの人があそこに病みついたからで、それから三年というもの、わたしは夜も日もホツとするひまがなかつた。病人にいびり抜かれて、心がカサカサになつてしまいました。とうとう去年、借金の始末に

別荘が人手にわたってしまふと、わたしはパリへ行きました。

そこで、わたしから搾れるだけ搾りあげた挙句、あの人にはわたしを捨てて、ほかの女と一緒にになったの。わたし毒をのもうと

しました。……われながら浅ましい、世間に顔向けならない気がしてね。……ところが、急に帰りたくなつたの——ロシアへ、

生れ故郷へ、ひとり娘のところへね。……（涙をふく）神さま、

ああ神さま、どうぞお慈悲で、この罪ぶかい女をお赦ゆるしてください

いまし！ この上の罰は、堪かん忍にんしてくださいまし！（ポケ

ットから電報を出して）今日、パリから来たの。……赦してくれ、帰つて来てくれ、ですつて。……（電報を引裂く）どこか

で音楽がきこえるようね。（耳を澄ます）

ガーエフ あれは、ここの有名なユダヤ人の楽団だよ。ほら覚えてるだろう。バイオリンが四つに、フルートとコントラバス。ラネーフスカヤ あれ、まだあるの？ なんとかあれを呼んで、夜会を開きたいものね。

ロパーヒン (耳をすます) 聞えないな…… (小声で口ずさむ)

「金かねのためならドイツっぽうは、ロシア人化ばかしてフランス人に変える」 (笑う) いや、きのうわたしが劇場で見た芝居といったら、じつに滑稽こっけいでしたよ。

ラネーフスカヤ ちつとも滑稽じゃないのよ、きつと。あんたは芝居なんか見ないで、せいぜい自分を眺ながめたほうがよくつてよ。なんてあんたの暮しは、不趣味なんでしょう、よけいなおしや

べりばかりして。

ロパーヒン そりやそうです。正直のはなし、われわれの暮しは馬鹿げています。……（間）うちの親父はおやしどん百姓で、アホーで、わからず屋で、わたしを学校へやつてもくれず、酔っぱらっちゃ殴りつけるだけでした——それも棒つきれでね。底を割つて言えば、わたしもご同様、アホーで、でくのぼうなんです。何一つ習ったことはなし、字を書かしたらひどいもんで、とても人さまの前には出せない豚の手ですよ。

ラネーフスカヤ 結婚しなくちゃいけないわ、あなたは。

ロパーヒン なるほど。……そりやそうです。

ラネーフスカヤ うちのワリーヤはどう？ いい子ですよ。

ロパーヒン なるほど。

ラネーフスカヤ あの子は百姓のうちから貰もらわれてきて、あのとおりの働きもんだし、第一あなたを愛していますわ。それにあんただって、とうからお好きなんだし。

ロパーヒン そりやまあ、わたしも嫌いじゃありません。……いい娘さんです。(間)

ガーエフ わたしを銀行へ世話しよう、と言ってくれる人があるんだがね。年収六千というんだが……。聞いたかね？

ラネーフスカヤ 柄がらでもないわ！ まあ、じつとしてらっしやい

……

フィールルス登場。外套をもつてきたのである。

フィールルス（ガーエフに）さあさ、旦那さま、お召しになって。
じめじめして参りましたよ。

ガーエフ（外套を着る）お前には閉口だよ、爺じいや。

フィールルス あきれたお人だ。……今朝だつて、黙つてふらりと
お出かけにはなるし。（彼をじろじろ眺めまわす）

ラネーフスカヤ なんて年をとつたの、お前は。ええフィールルス
！

フィールルス なんと仰しやいましたので？

ロパーヒン お前さんがひどく老ふけたと仰しやるんだよ！

フイールス 長生きしましたからな。いつだったか、嫁をとれと言われた時にや、あなたのお父さまもまだこの世に生れておいでになりませんでしたよ。……（笑う）解放令（訳注 一八六一年に公布された農奴解放令）が出た時にや、わたしはもう下男頭になっておりました。あの時わたしは、自由民になるのはご免だと申して、引きつづきご奉公をいたしましたよ。……

（間）当時は、忘れもしませんが、みんな面白おもしろおかしくやつておりましたよ。何が面白いのか、自分たちもわからずにね。ロパーヒン 昔はまったく好よかったよ。とにかく、存分ひっぱたいたからなあ。

フイールス （よく聞きとれずに）そりやそうとも。昔は、旦那

あつての百姓、百姓あつての旦那でしたものねえ。それが今じや、てんでんばらばらで、何がなんだかわかりはしねえ。

ガーエフ　ちよつと待った、フィールズ。あすわたしは、町へ出かけなければならん。ある將軍に引合わせてくれるという約束なんだ。その人が、手形で融通してくれそうなんでね。

ロパーヒン　なあに物になりやしませんよ。利子だつて払えるもんですか、まあ安心してらっしゃい。

ラネーフスカヤ　このひと寝言を言ってるのよ。將軍なんて、いるものですか。

トロフィーモフ、アーニヤ、ワーリヤ登場。

ガーエフ さあ、連中がやってきた。

アーニヤ ママがいるわ。

ラネーフスカヤ (優しく) おいで、さ、こっちへ。……二人とも、いい子ね……。 (アーニヤとワーリヤを抱く) わたしがどんなにあなたがたを愛してるか、わかってくれたらねえ。ならんでお坐^{すわ}り、ほらね、こう。

みなみな腰をおろす。

ロパーヒン わが万年大学生先生は、いつもお嬢さんがたと一緒

だね。

トロフィーモフ 君の知ったことじゃない。

ロパーヒン この人は、そろそろ五十になるといふのに、相変らずまだ大学生だ。

トロフィーモフ 愚劣な冗談はいい加減にしたまえ。

ロパーヒン 何を怒るんだね、変ってるなあ？

トロフィーモフ ほっといてくれたら。

ロパーヒン (笑う) ところで一つ伺うけれど、君は僕ぼくのことを、
なんと思ってるかね？

トロフィーモフ 僕はね、ロパーヒン君。こう思ってますよ——
あんたは金持だ、おっつけ百万長者になるだろう。新陳代謝の

意味では、猛獣が必要だ。なんでも手当り次第、食つちまうやつがね。君の存在理由も、要するにそれさ。

一同わらう。

ワーリヤ　ねえペーチャ、あんたは遊星ほしの話でもしたほうが似合
うわ。

ラネーフスカヤ　それよか、どう、きのうの話の続きをしたら。

トロフィーモフ　なんの話でしたっけ？

ガーエフ　人間の誇りのことさ。

トロフィーモフ　きのうは、長いこと議論したけれど、けつきよ

く結論は出ませんでしたね。あなたの言われる意味で行くと、人間の誇りなるものには、何か神秘的なところがありますね。まあそれも、一説として正しいかも知れません。がしかし率直に、きよしんたんかい虚心坦懐に判断してみるとです、そもそもその誇りなるものが怪しいと言わざるを得ない。げんに人間が生理的にも貧弱にできあがっており、その大多数が粗野で、愚かで、すこぶるみじめなきようがい境涯にある以上、誇りとかなんとかいっても、なんの意味があるでしょうか。自惚うぬぼれはいい加減にして、ただ働くことですよ。

ガーエフ どっちみち死ぬのさ。

トロフィーモフ わかるもんですか？ 第一、死ぬとは一体なん

でしょう？　もしかすると、人間には百の感覚があつて、死ぬとそのうちわれわれの知っている五つだけが消滅して、のこる九十五は生き残るのかも知れない。

ラネーフスカヤ　なんてお利口さんなんでしょう、ペーチャ！

……

ロパーヒン　（皮肉に）おつそろしくね！

トロフィーモフ　人類は、しだいに自己の力を充実しつつ、進歩して行きます。今は人知の及びがたいものでも、いつかは身近な、わかり易いものになるでしょう。ただそのためには、働かなければならない。真理を探求する人たちを、全力をあげて援助しなければならんです。今のところ、わがロシアでは、ご

く少数の人が働いているだけで、僕の知っているかぎりインテリ「ゲンツイヤ」の大多数は、何一つ求めもせず、何一つしもせず、差当り勤労に適しません。インテリなどと自称しながら、召使は「きさま」呼ばわりする、百姓は動物あつかいにする、ろくろく勉強もせず、何一つ真面目まじめには読まず、なんにもせず、ただ口先で科学を云々うんぬんするばかり、芸術だつてろくにわかつちやいない。みんな真面目くさつて、さも厳肅な顔つきをして、厳肅なことばかり口にし、哲学をならべているが、その一方かれら一人一人の眼の前では、労働者たちがひどい物を食まくらい、一部屋に三十人四十人と、枕まくらもしないで寝ている。（訳注

*以下は上演当時の検閲のため削除されたので、一九〇四年

の初版本には、次のようにぼかされていた。——「その一方、われわれの大多数、百中の九十九までが、野蛮人みたいな暮らしをして、何かといえ——すぐぶんなぐる、罵倒する、ひどい物を食って、息のつまるような汚ない所に寝て」——どこもかしこも南京虫と、鼻をつく悪臭と、ひどい湿気と、道徳的腐敗ばかりです。……で、われわれのやる麗々しい会話はみんな、ただ自分や他人の眼をくらますためであることは、言わずして明らかです。ひとつ教えていただきたい、——あれほどやかましく喋ちやうちやうち々ちやうちやうちされている託児所は、一体どこにあるんです？

読書の家は、どこにあります？ それは小説に出てくるだけで、実際は全然ありやしない。あるのはただ、泥どろんこと、俗悪と、

アジア的野蠻だけだ。……僕は、真面目くさった顔つきが、身ぶるいするほど嫌いきらです。真面目くさった会話にも、身ぶるいが出る。いつそ黙っていたほうがましですよ。

ロパーヒン いや、わたしはね、毎朝四時すぎに起きだして、朝から晩まで働きづめでしょつちゆう自分や他人の金を扱っているが、見れば見るほど、まわりの人間が厭いやになるね。何かちよいと新しい仕事に手をつけさえすりや、世間に正直な、まともな人間がどんなに少ないかが、すぐにわかる。時どき、寝られない晩なんか、こんなことを考えたりしますよ、——「神よ、あなたは実にどえらい森や、はてしもない野原や、底しれぬ地平線をお授けになりました。で、そこに住むからには、われわ

れも本当は、雲つくような巨人でなければならんはずです……」
とね。

ラネーフスカヤ　まあ、巨人がご入用ですって……。お伽ときばなし話
のなかでこそ、あれもいいけれど、ほんとは出てきたら怖いわ。

舞台の奥をエピホードフが通りかかって、ギターを弾く。

ラネーフスカヤ　（もの思わしげに）エピホードフが歩いてる。

……

アーニヤ　（もの思わしげに）エピホードフが歩いてる。

ガーエフ　日が沈んだよ、諸君。

トロフィーモフ そう。

ガーエフ (低い声で、朗読口調で) おお、自然よ、靈妙なるものよ、おんみは不滅の光明に輝く。われらが母と仰ぐ、美しく冷やかなおんみは、おのれのうちに生と死を結び合わす。おんみは物みなを生み、物みなを滅ぼす。……

ワーリヤ (哀願するように) 伯父さん！

アーニヤ 伯父さま、また！

トロフィーモフ あなたは、黄玉を空クツションからで真ん中へ、のほうがいいですよ。

ガーエフ 黙るよ、黙っているよ。

みんな坐つて、物思いに沈む。静寂。聞えるのは、フィール
スの小声のつぶやきばかり。不意にはるか遠くで、まるで天
からひびいたような物音がする。それは弦つるの切れた音で、し
だいに悲しげに消えてゆく。

ラネーフスカヤ なんだろう、あれは？

ロパーヒン 知りませんなあ。どこか遠くの鉦山で、ウインチ巻揚機の綱

でも切れたんでしょう。しかし、どこかよっぽど遠くですなあ。

ガーエフ もしかすると、何か鳥が舞いおりたのかも知れん……

あお蒼サギか何かが。……

トロファイモフ それとも、大ミミズクかな……

ラネーフスカヤ (身ぶるいして) なんだか厭な気持。(間)

フィールス あの不幸の前にも、やはりこんなことがありました。フクロウも啼なきたてたし、サモワールもひつきりなしに唸うなりましたつけ。

ガーエフ 不幸の前というと？

フィールス 解放令の前でございますよ。(間)

ラネーフスカヤ ねえ皆さん、うちへはいりましようよ、日が暮れてきたわ。(アーニヤに) まあ、涙なんか溜ためて……。どう

かしたの、アーニヤ？ (抱きよせる)

アーニヤ なんでもないの、ママ。ただ、ちよつと。

トロフィーモフ 誰^{だれ}か来る。

浮浪人が出てくる。古ぼけたヒサシ帽をかぶり、
 とい、少し酔っている。
 外套^{がいとう}をま

浮浪人 ちよつとお尋ねしますが、ここをまつすぐ、停車場へ出
 られますかね？

ガーエフ 出られますよ。その道をお行きなさい。

浮浪人 ご親切に、おそれ入ります。(咳^{せき}ばらいをして) まこと
 によいお天気で……(朗読する) はらからよ、苦しみ悩むはら
 からよ。……出^いでてみよ、ヴォルガのほとり、聞ゆるは誰^{うめ}の呻

きぞ。(訳注 ネクラーツフの詩より) …… (ワーリヤに) マ
ドモワゼル、この飢えたるロシアの民に、三十コペイカほどど
うぞ……

ワーリヤおびえて、声を立てる。

ロパーヒン (憤然として) 無作法にも程度というものがあるぞ。
ラネーフスカヤ (怖気おしけづいて) 持ってらつしやい……さあ、こ
れを…… (巾きんちやく着きの中をさがす) 銀貨がないわ。……まあい
い、さ、この金貨を……

浮浪人 ご親切に、おそれ入ります！ (退場)

笑い。

ワリーヤ　（あきれて）わたし行くわ……あっちへ行くわ。……
お母さまったら、うちの人たちに食べさせる物がないというの
に、あんな男に金貨をやるなんて。

ラネーフスカヤ　わたし馬鹿ばかなんだもの、仕方がないわ！　うち
へ帰ったら、わたしの手持ちを残らず渡すからね。ロパーヒン
さん、また貸してちょうだい！　……

ロパーヒン　承知しました。

ラネーフスカヤ　さあ行きましよう、皆さん、時刻ですわ。そう

そうワリーヤ、さつきここでね、お前の縁談をととのえましたよ、おめでとう。

ワリーヤ（涙ごえで）そんなこと、冗談に仰しやるもんじやないわ、ママ。

ロパーヒン オフメーリア（訳注 オフィーリアをわざわざ、オストロフスキーの有名な芝居の登場人物の名にもじったもの）。

この名は「一杯きげん」の意味を含んでいるおかしみがある）、
ささ尼寺へ……

ガーエフ どうも手がふるえてならん、久しく玉突きをやらないもんだから。

ロパーヒン オフメーリア、お水妖ニッフよ。躬みが上も祈り添えてた

もれ！

ラネーフスカヤ　行きましたようよ、皆さん。そろそろお夜食よ。
ワーリヤ　あの男のおかげで、ほんとにびっくりしたわ。胸がこ
んなにドキドキしている。

ロパーヒン　念のため申しあげておきますが、皆さん、八月二十
二日には桜の園は競売になります。お考えねがいますよ！　…
…よくお考えをね！　…

トロフィーモフとアーニヤのほか、一同退場。

アーニヤ　（笑いながら）浮浪人さん、ありがとう。ワーリヤを

おどかしてくれたおかげで、やっと二人きりになれたわ。

トロフィーモフ　ワーリヤはね、僕たちがもしや恋仲になりはしまいかと警戒して、毎日、朝から晩まで、ああして付きつきりなんだ。あの人は、自分の狭い料りようけん簡で、われわれが恋愛を超越していることがわからないんだ。われわれの自由と幸福をさまたげている、あのけちくさい妄想もうそつを追っぱらうこと、これが僕らの生活の目的であり意義なんです。進みましょう、前へ！　僕らは、はるか彼方かなたに輝いている明るい星をめざして、まっしぐらに進むのだ！　前へ！　おくれるな、友よ！

アーニヤ　（手をたたいて）すてきだわ、あなたの話！　（間）

今日、ここはなんていいんでしょう！

トロフィーモフ　そう、すばらしい天気です。

アーニヤ　あなたのおかげで、わたしどうかしてしまつたわ、ペーチャ。なぜわたし、前ほど桜の園が好きでなくなつたのかしら？　あんなに、うつとりするほど好きだつたのに、——この世に、うちの庭ほどこい所はないと思つていたのに。

トロフィーモフ　ロシアじゆうが、われわれの庭なんです。大地は宏こうだい大で美しい。すばらしい場所なんか、どつきりありますよ。（間）ね、思つてもご覧なさい、アーニヤ、あなたのお祖じ父いさんも、ひいお祖父さんも、もつと前の先祖も、みんな農奴制度の讚さんびしや美者で、生きた魂を奴隷どれいにしてしぼり上げていたんです。で、どうです、この庭の桜の一つ一つから、その葉の一

一枚一枚から、その幹の一本一本から、人間の眼めがあなたを見て
いはしませんか、その声があなたには聞えませんか？ ……生
きた魂を、わが物顔にこき使っているうちに——それがあなた
がたを皆、むかし生きていた人も、現在いきている人も、すつ
かり墮落させてしまつて、あなたのお母さんも、あなたも、伯
父さんも、自分の腹を痛めずに、他人ひとのふところふところで、暮してい
ることにはもう気がつかない、——あなた方が控室より先へは
通さない連中の、ふところふところでね。（訳注 *以下は上演当時の
検閲のため削除されたので、一九〇四年の初版本には、次のよ
うに言いかえられていた。——「ああ、怖ろしいことだ、お宅
の庭は不気味です。晩か夜なかに庭を通り抜けると、桜の木の

古い皮がぼんやり光つて、さも桜の木が、百年二百年まえにあつたことを夢に見ながら、重くるしい幻にうなされていような気がします。いやはや、まったく！」……われわれは、少なくとも二百年は後れています。ロシアにはまだ、まるで何一つない。過去にたいする断乎だんこたる態度ももたず、われわれはただ哲学をならべて、憂鬱ゆううつをかこつたり、ウオツカを飲んだりしているだけです。だから、これはもう明らかじやありませんか、われわれが改めて現在に生きはじめるとするには、まずわれわれの過去をあがない、それと縁を切らなければならぬことはね。過去をあがなうには、道は一つしかない、——それは苦惱です。世の常ならぬ、不断の勤勞です。そこをわかつてください、ア

アーニヤ。

アーニヤ わたしたちの今住んでいる家は、もうとうに、わたしたちの家じゃないのよ。だからわたし出て行くわ。誓つてよ。

トロフィーモフ もしあなたが、家政の鍵を[あずか](#)っているのなら、それを井戸のなかへぶちこんで、出てらっしゃい。そして自由になるんです、風のようにね。

アーニヤ (感激して) それ、すばらしい表現だわ!

トロフィーモフ 信じてください、アーニヤ、僕を信じて! 僕はまだ三十にならない、僕は若い、まだ学生ですが、これはいぶん苦勞はして来ましたよ! 冬になると、たちまち僕は口が乾ひあがつて、病みついて、いらいらして、乞食こじきも同然の境涯

に落ちこんで、——運命の追うがままに、所きらわずほつつき歩いたもんです！ それでもやっぱり僕の心は、夜も昼もたえず、いついかなる瞬間にも、一種なんとも言えぬ予感に満たされていきました。僕は幸福を予感します、アーニヤ、僕にはもうそれが見える……

アーニヤ（もの思わしげに）月が出たわ。

エピソードが相変わらず同じわびしい歌を、ギターで弾いているのが聞える。月がのぼる。どこかポプラの木のへんで、ワリーヤがアーニヤをさがしながら、「アーニヤ！ どこにいるの？」と呼んでいる。

トロフィーモフ そう、月が出ました。(間) さら、あれが幸福です。もうやって来た、だんだん近づいてくる。僕にはもう、その足音がきこえる。よしんば、僕たちにそれが見つからず、ああこれだと悟る時がないにしても、それがなんですか？ 誰かが見つけますよ！

ワーリヤの声 アーニヤ！ どこにいるの？

トロフィーモフ またワーリヤだ！ (忌^{いまいま}々しそうに) 厭になるなあ、まったく。

アーニヤ かまわないわ。川のほうへ行きましょうよ。あすこはよくつてよ。

トロフィーモフ　行きましよう。（ふたり歩きだす）
ワーリヤの声　アーニヤ！　アーニヤ！

—幕—

第三幕

アーチで奥の広間と区切られた客間。シャンデリアがともっている。次の間で、ユダヤ人の楽団の演奏がきこえる。二幕目に出たあれである。宵よい。広間ではグラン・ロン（訳注 大円舞）の最中。やがて《Promenade 《プロムナード》

[a'] 《ア》 une 《ユヌ》 paire 《ペール》!」（訳注 一組 ずつ行進!）というシメオーノフ||ピーシチクの掛声がして、順々に舞台へ出てくる。——先頭の組はピーシチクとシャルロット、二番目はトロフィーモフとラネーフスカヤ夫人、三

番目はアーニヤと郵便官吏、四番目はワーリヤと駅長、等々。ワーリヤは忍び泣きに泣いており、踊りながら涙をふく。最後の組にドウニヤーシヤ。

みなみな客間を一巡して広間へ。ピーシチクの掛声——《G rand 《グラン》 rond 《ロン》, balancez 《バランセ》i》(訳

注 大円陣、みぎ左へ!) 《Les 《ラ》 [cavaliers a`] カヴァリエザ genou

x 《ジュヌー》 et 《エ》 remerciez 《ルメルシエ》 vos 《ヴォ》 dames 《ダーム》i》(訳注 騎士はひざまずいて、貴婦人に謝意を表わす!)

フィールスが燕尾服えんびふくすがたで、炭酸水ゼルテルを盆にのせて持つ

て出る。客間にピーシチクとトロファイーモフ登場。

ピーシチク わたしはどうも多血質でね、もう二度も卒中にやられていゝるもんで、踊りはどだい無理なんだが、下世話にもいうとおりに、おつきあいなら吠ほえないまでも、せめて尻尾しつぽを振るがよい——だからな。丈夫なことといつたら、わたしは馬もはだしさ。わたしなの亡なくなつた親父おやじは、剽ひょう軽きんな人だつたが、——天国に安らわせたまえ——うちの家系けいのことで、こんなことを言つていたつげ。このシメオーノフⅡピーシチクという古い家柄いえがらは、どうやらあのカリグラ皇帝てい（訳注 ローマ三代目の皇帝。暴君で、自分の愛馬に元老院の議席を与えたりした）が

元老院の議席につけた例の馬から出ているらしい、とき。……

(腰かける)だが、困ったことには、金がない！ かつえた犬には肉こそ黄金こばん、といつてな。……(いびきをかき、すぐまた目を覚ます)わたしもそれさ……金のことしか頭にないのさ……

トロフィーモフ そう言えば、あなたの格好には、実際なにか馬に通ずるところがありますね。

ピーシチク なあに……馬はいい獣だ……だいいち売れるからな……

となりの部屋で、玉突きの音がする。広間のアーチの下に、

ワーリヤが姿を見せる。

トロフィーモフ （からかつて） マダム・ロパーヒン！ マダム

・ロパーヒン！ ……

ワーリヤ （ムツとして） 禿はげの旦だんな那！

トロフィーモフ いかにも、僕ぼくは禿はげの旦だんな那だ、それを誇りとしてるんだ！

ワーリヤ （くよくよ案じながら） 楽隊をやとったりして、払いはどうするつもりかしら？ （退場）

トロフィーモフ （ピーシチクに） あなたが一生のあいだに利子を払う金の工面に費やしたエネルギーが、何かもしほかのこと

に向けられたとしたら、おそらくあなたはとどのつまり、地球をひっくり返すこともできたろうになあ。

ピーシチク ニーチェがね……哲学者の……誰だれしらぬ者もない、えら物ぶつちゆうのえら物の……あのすごい知恵者がな、その著述のなかで、にせ札は作ってもいいとか言っているが。

トロフィーモフ あなたは、ニーチェを読んだんですか？

ピーシチク いや、なに。……うちのダーシエンカが話してくれたのさ。ところで現在わたしは、ええ一つ、にせ札でも作ってやろうか、といった土壇場どたんばでな。……あさつて三百十ループリ払わにやならん……百三十はやつとできたが……（ポケットをさわってみて、あわてて）金がなくなつた！ 金を落したぞ！

(泣き声で) どこへ行つたんだらう? (嬉し^{うれ}そうに) ああ、あつた、服の裏へもぐりこんでいた。……やれやれ、冷汗が出たわい……

ラネーフスカヤとシャルロツタ登場。

ラネーフスカヤ (コーカサスの舞曲を口ずさむ) レオニードは、
どうしてこう遅いのだらう? 町で何をしているのかしら?

(ドウニヤーシヤに) ドウニヤーシヤ、楽隊の人にお茶をあげ
て……

トロフィーモフ 競売はお流れになつたんですよ、きっとそうで

す。

ラネーフスカヤ 楽隊の来たのも折が悪かつたし、舞踏会も生あいに
憎くの時に開いたものだわ。……まあ、いいさ。……（腰かけ
て、そつと口ずさむ）

シャルロット （ピーシチクにカードを一組わたす）さあ、カ
ドを一組あげましたよ。どれか一枚だけ、頭のなかで考えてく
ださい。

ピーシチク 考えました。

シャルロット では、よく切ってください。大そう結構。こちら
へ頂かしてください、おお、いとしいピーシチクさん。一アイツワイ、二、
三！ドライ さあ、捜してごらんささい、その札はあなたわきの脇ポケット

トにあります……

ピーシチク （脇ポケットからカードを取り出す）スペードの八、まさにその通り！（驚嘆して）こりや、どうだ！

シャルロツタ （手の平にカードを一組のせて、トロフィーモフに）早く言ってください、一ばん上のカードは？

トロフィーモフ なにさ？ じゃ、スペードのクイン。

シャルロツタ はい！（ピーシチクに）では？ 一ばん上のカードは？

ピーシチク ハートのエース。

シャルロツタ はい！ ……（手の平を打つ、カードの一組きえ失せ^うる）さて、今日はなんていいお天気でしょう！（不可思

議な女の声が、さながら床下からひびくように答える、――

「ええ、ほんとに、いいお天気ですこと、奥さん」あなたは、なんとも申しぶんのない、わたしの理想の人よ。……（声、――
――「わたしも、奥さん、あなたが大好きです」）

駅長（拍手する）よう、腹話術の名人、ブラヴォー！

ピーシチク（驚嘆して）こりや、どうだ！ いや、あなたは魔女か妖ようせい精か、シャルロットさん……わしはすっかりあなたに惚ほれましたよ……

シャルロット 惚れたですって？（肩をすくめて）あなたに恋

ができました？ Guter 《グータ》 Mensch 《メンシ》, aber 《ア

ーバ》 schlechter 《シレヒタ》 Musikant 《ムジカント》・（訳注

ドイツ語。「人はいいが音楽は下手」)

トロフィーモフ (ピーシチクの肩をたたいて) まったく、なんて馬だろう、あんたは……

シャルロツタ では皆さん、もう一番、手品をご覧に入れます。

(椅子いすから格子こうしじま縞の膝掛ひざかけを取る) これは飛びきり極上の羅ラ紗シヤでございます、これをお売りいたします…… (振ってみせる)

買いたい方はありませんか？

ピーシチク (驚いて) こりやどうだ！

シャルロツタ アイン・ツワイ・ドライ！ (おろした布をパツ

と上げる。布のうしろにアーニヤが立っている。彼女は膝をかがめて会えしやく釈やくをして、母親へ走り寄り、抱擁して、満座熱狂の

うちに広間へ駆けもどる)

ラネーフスカヤ (拍手して) ブラヴオー、ブラヴオー! ……

シャルロツタ では、もう一番! アイン・ツワイ・ドライ!

(布を上げると、うしろにワリーヤが立って、おじぎをする)

ピーシチク (驚いて) こりや、どうだ!

シャルロツタ はい、おしまい! (布をピーシチクに投げかけ、

膝をかがめて会釈し、広間へ走り去る)

ピーシチク (いそいで追いかけながら) この悪者……いやはや

! なんと! (退場)

ラネーフスカヤ でも、レオニードはまだね。何を町でぐずぐず

してるんだらう、変だこと! 領地が売れたにしろ、競売がお

流れになったにしろ、どっちみちケリがついているはずなのに、なんだっていつまでも知らせてくれないのかしら！

ワリーヤ（なだめようと懸命に）伯父さんが落札なすったのよ、きつとですわ。

トロフィーモフ（冷笑的に）なるほどね。

ワリーヤ おばあさんから伯父さんへ、委任状が来ましたのよ——おばあさんの名義で買戻して、借金もとは肩代りにするようになって。アーニヤのために計らってくださいましたんですわ。だからわたし、それが神さまに通じて、伯父さんが落札なさるに違いないと思うの。

ラネーフスカヤ ヤロスラーヴリのおばあさまが、ご自分の名義

で領地をかうようにつて、送つてくだすつたお金は一万五千ルーブリなのよ、——わたしたち信用がないんだわ、——そんなお金じゃ、利子の払いにも足りやしない。(両手で顔をおおう) 今日こそ、わたしの運命のきまる日よ、運命の……

トロフィーモフ (ワーリヤをからかう) マダム・ロパーヒン！
ワーリヤ (怒つて) 万年大学生！ 二度ももう、大学を追い出されたくせに。

ラネーフスカヤ 何をおこるのさ、ワーリヤ？ この人が、ロパーヒンのことでお前をからかつたつて、それがなんです？ 嫁いきたければ——ロパーヒンの嫁になるがいいわ。あれは見どころのある、いい人間だもの。いやなら——嫁いかないがいいのさ。

誰もお前を、束縛しやしない。……

ワーリヤ わたし正直に言えば、このことは真剣に考えていますの。あの人はいい人間で、わたし好きですわ。

ラネーフスカヤ じゃ、嫁いつたらいいじゃない。何を待つことがあるの、気が知れないわ！

ワーリヤ だって、お母さん、自分であの人に申込みをするわけには行きませんもの。現にこの二年というもの、みんながわたしに、あの人のことを言うの、寄つてたかつてね。ところがあの人は、黙っているか、冗談にまぎらしてしまふかですの。それもわかるわ。あの人はますますお金ができて、事業で忙しくて、わたしどころじゃないのよ。もしもわたし、お金があつた

ら、——たとえ少しでも、せめて百ルーブリでもあつたら、わたしは何もかもうつちやつて、身をかくしてしまうわ。尼寺へはいつてしまうわ。

トロフィーモフ　そいつはずばらしい！

ワリーヤ　（トロフィーモフに）大学生は、もう少し利口なものよ

！　（口調を柔らげて、泣き声で）なんてあなた、風采ふうさいが落

ちたの、ペーチャ、なんて老ふけてしまったのよ！　（もう泣か

ずに、ラネーフスカヤ夫人に）ただね、こうして仕事をしない

でいるのが辛いつらいのよ、ママ。わたし、一分一秒、何かせずには

いられないの。

ヤーシヤ登場。

ヤーシヤ (やつと笑いをこらえながら) エピホードフが、キユ撞球

棒¹を折りました! …… (退場)

ワーリヤ なんだつてエピホードフがいるの? 誰があれに、玉

突きをしろと言いました? あの人の気が知れないわ。:

: (退場)

ラネーフスカヤ あの子をからかわないでね、ペーチャ、ただで
さえ、苦勞の多い子なんですから。

トロフィーモフ お節介すぎますよ、あの人は、ひとの事にまで
くちばしを入れたりして。この夏じゆう、僕もアーニヤもじつ

に悩まされた、——ふたりの間にロマンスでも起りやしないかと、それがあのひと心配で堪たまらないんです。あの人の知ったことですか？ おまけに僕は、そんな気振けぶりも見せないのにね。僕はそれほど俗悪じゃありませんよ。われわれは恋愛を超越してるんです！

ラネーフスカヤ　じゃ、きつと、わたしは恋愛以下なのね。（はげしい不安に駆られて）レオニードはどうしたんだろう？　領地が売れたかどうか、それだけでもわかればねえ！　わたし今度の災難が、あんまり嘘うそみたいだもんだから、何を考えたものやら、見当さえつかずに、ぼおつとしているの。……今にもわたし、大声でわめきだすか……何か馬鹿ばかなまねをしそうだわ。

わたしを助けて、ペーチャ。何か話をしてちょうだい、ね、何か……

トロフィーモフ 領地が今日売れようと売れまいと——同じことじゃありませんか？ あれとはもう、とつくに縁が切れて、今さら元へは戻りません、昔の夢ですよ。気を落ちつけてください、奥さん。いつまでも自分をごまかしていずに、せめて一生に一度でも、真実をまともに見ることです。

ラネーフスカヤ 真実をねえ？ そりやあなたなら、どれが真実でどれがウソか、はつきり見えるでしょうけれど、わたし、なんだか眼が霞めんでしまっかすたみたいで、何一つ見えないの。あなたはどうな重大な問題でも、勇敢にズバリと決めてしまいなさ

るけれど、でもどうでしょう、それはまだあなたが若くって、何一つ自分の問題を苦しみ抜いたことがないからじゃないかしら？ あなたが勇敢に前のほうばかり見ているのも、元をただせば、まだ本当の人生の姿があなたの若い眼から匿かくされているので、怖いものなしなんだからじゃないかしら？ わたしたちに比べれば、あなたはずっと勇敢で、正直で、深刻だけれど、もっとよく考えてね、爪つめの先ほどでもいいから寛大な気持になって、わたしを大目に見てちょうだい。だってわたしは、ここで生れたんだし、お父さんもお母さんも、お祖父じいさんも、ここに住んでいたんですもの。わたしはこの家がしんから好きだし、桜の園のないわたしの生活なんか、だいいち考えられやしない。

どうしても売らなければいけないのなら、いつそこのわたしも、庭と一緒に売ってちようだい。……（トロフィーモフを抱きしめて、その額にキスする）坊やもここで、溺れ死んだんですものね。……（泣く）わたしを哀れと思って、ね、あなたは親切な、いい人ですもの。

トロフィーモフ　ぼくが心しんから同情してること、ご存じじゃないですか。

ラネーフスカヤ　そんならそれで、何かもつと、別の言い方があ
るはずだわ。……（ハンカチを取りだす拍子に、電報がゆかへ
落ちる）わたし今日は気が重くてならない。この気持、とても
あなたにはわからないわ。ここは騒々しくって、物音一つする

ごとに、胸がドキリとする。からだじゆう、ふるえてくる。でも、居間へ引っこむわけにもいかない。静かなところに、一人でいるのはやりきれないもの。わたしを責めないでね、ペーチャ。……わたしあなたが好きで、他人のような気がしない。あなたになら、わたし喜んでアーニヤを上げるわ、ほんとによ。でもただね、あなたは勉強しなくちゃ駄目だめ、卒業しなくちゃね。あなたはなんにもせず、運命のままにふらふらしてなさるけれど、ほんとに妙だわ。……そうじゃなくて？　ね？　それに、その顎あごひげだつて生やすなら生やすで、もう少しなんとかしなくちゃねえ。……（笑う）可笑おかしな人！

トロフィーモフ　（電報を拾つて）僕は好男子になりたかありま

せん。

ラネーフスカヤ　これ、パリから来た電報なの。毎日くるのよ。
きのうも今日も。あのガムシヤラ屋さんは、また病気になつて、
工合がわるいの。……どうぞ赦^{ゆる}してくれ、どうぞ帰つて来てく
れ、と言うんだけれど、考えてみればやっぱり、わたしパリへ
行つて、あの人のそばにいてやるのが本当なのね。あなたは、
むずかしい顔をしてるけれど、ねえペーチャ、わたし、どうし
ようもないじゃないの！　あの人は病気で、一人ぼっちで、辛
い目にあつてるといふのに、誰があの人のお世話をするの、誰が
あの人にケガのないようにお守り^もをするの、誰が時間どおりに
薬をのませるの？　今さら包みかくしたところでしようはない

わ、わたしあの人を愛しています、そりや明白よ。愛している、愛してますとも。……それはわたしの頸くびに結えつけられた重石おもしで、その道づれになってわたしは、ぐんぐん沈んで行くけれど、やっぱりその重石が思いきれず、それがないじゃ生きて行けないの。(トロフィーモフの手を握る) 悪く思わないでね、ペーチャ、わたしに何も言わないで、ね、言わないで……

トロフィーモフ (涙ごえで) 率直に言わせてください、お願いです。あの男は、あなたからすっかり捲まきあげたじゃないですか！

ラネーフスカヤ いや、いや、いや、それを言わないで…… (両耳をふさぐ)

トロフィーモフ あいつは碌ろくでなしです、それを知らないのはあなただけだ！ あいつはケチなやくざ野郎で、虫けらみたいな

……

ラネーフスカヤ (ムツとするが、じつところえて) あなたは二十六か七のはずね。なのに、まるで中学の二年生みたい！

トロフィーモフ かまやしません！

ラネーフスカヤ もっと大人にならなけりや駄目よ。あなたの年になれば、恋をする人の気持ぐらい、わからなければね。そして自分も恋をしなくてはね……夢中になつてね！ (腹だたし

げに) そうよ、そうですとも！ あんただつて、純潔なんかあるもんですか。ただ気どつてるだけよ、滑稽こっけいな変り者よ、片

輪よ……

トロフィーモフ (あつけ) 呆氣にとられて) 何を言うんだ、この人は!

ラネーフスカヤ 「恋愛を超越してる」ですって! 超越するど

ころか、あんたはうちのフィールの言うように、この出来そこねえめ、ですよ。その年をして、恋人ひとりいないなんて!

……

トロフィーモフ (仰天して) こりや、ひどい! 何を言い出す

んだ (頭をかかえて、広間へ急ぐ) まったくひどい。……

とてもたまらん、僕は行こう…… (退場。しかしすぐ戻って来

て) もうあなたとは絶交です! (次の間へ退場)

ラネーフスカヤ (うしろから叫ぶ) ペーチヤ、待ってちようだ

い！ おかしな人ね、ちよつと冗談いっただけじゃないの！
ペーチャ！

次の間の階段を、誰かが大急ぎで登って行く足音がし、とつ
ぜんドシンと落ちる音がする。アーニヤとワーリヤの叫び声。
しかしすぐ笑い声になる。

ラネーフスカヤ おや、どうしたんだらう？

アーニヤが駆けこむ。

アーニヤ（笑いながら）ペーチャがね、階段から落つこちたの
！（走り去る）

ラネーフスカヤ　なんておかしな人だろう、あのペーチャは……
駅長が広間の真ん中に立ちどまつて、A・K・トルストイの
『罪の女』（訳注　ロシア十九世紀の詩人・劇作家トルスト
イの叙事詩。次にその数行を例示する。——「若き罪の女は、
杯をほしつゝ、／その間に坐せり。／そのきらびやかの上よそ
おいは／人みな目の目をうばう、／その毒々しき髪かざりは／
罪の女のなりわいを語る」）を朗読する。一同謹聴するが、
何行も読まないうちに次の間からワルツのひびきが流れてき

て、朗読は中絶する。一同おどる。次の間から、トロフィーモフ、アーニヤ、ワーリヤ、ラネーフスカヤが出てきて、舞台にかかる。

ラネーフスカヤ　ねえ、ペーチャ……その純潔な心で、わたしを赦してちょうだい、……さ、一緒に踊りましょう。……（ペーチャと踊る）

アーニヤもワーリヤも踊る。

フィールスがいってきて、自分の杖を横手のドアのそばに立てかける。ヤーシヤも客間からはいって来て、ダンスを見

物する。

ヤーシャ どうした、爺じいさん？

フィールス 加減がわるくてな。昔はうちの舞踏会といやあ、將軍さまだの男だんしやく爵やくだの提督閣下だのが踊りに来なすつたもんだが、それが今じゃ、郵便のお役人だの駅長だのを迎えにやつて、それさえいい顔をして来やしない。どうもわしも、めつきり弱くなつたよ。亡なくなつた大旦那おおだんなさまは、みんなの病気を、いつも封ふうろう蠟ろうで療治なすつたものだ。今でもわしは、毎にち封蠟をのんでるが、これでもう二十六年か、その上にもなるかな。わしがこうして生きているのは、そのおかげかも知れんて。

ヤーシヤ お前さんの話にも、あきあきするよ、爺さん。(あくび) いっそさつさと、くたばつちまえばいいになあ。

フィールス ええ、この……出来そこねえめが！ (ぶつぶつつぶや眩く)

トロフィーモフとラネーフスカヤが広間で踊り、やがて客間で踊る。

ラネーフスカヤ ありがとう《メルシ》。わたし、ちよつと休みます。……(腰かける) 疲れたわ。

アーニヤ登場。

アーニヤ（わくわくして）いま台所で、どこかの人が、桜の園は今日、売れてしまったと話していたわ。

ラネーフスカヤ 誰だれが買ったの。

アーニヤ 誰とも言わずに、行ってしまったの。（トロフィーモフと踊る。ふたり広間へ去る）

ヤーシヤ それはね、どこかの爺さんがしやべってたんでさあ、よそもんでしたがね。

フィールス 旦那さまは、まだ見えない、まだお帰りがない。外が いとう套は、薄い合着を召してお出かけだったが、もしや風邪でも

お引きにならなけりやいいが、いやはや、若い人というもんは
！

ラネーフスカヤ わたし、今にも死にそうだ。ヤーシヤ、向うへ
行って聞いてきておくれ、誰が買ったのだから。

ヤーシヤ でも、とつくに行つてしまいましたよ、その爺さんは。

(笑う)

ラネーフスカヤ (いささかムツとして) まあ、何を笑うの、お
前は？ 何が嬉しいの？

ヤーシヤ あんまり、エピソードのやつがおかしいもんで。い
や、つまらん男で。二十二の不仕合せ。

ラネーフスカヤ フィールス、この領地が売れてしまったら、お

まえどこへ行くつもり？

フィールス 仰せのままに、どこへでも参ります。

ラネーフスカヤ お前、どうしてそんな顔をしてるの？ 加減で

も悪いの？ 向うへ行つて、やすんだらどう？ ……

フィールス へえ。……（にやりと笑つて）そりや、さがつて休むのも宜しいけれど、あとは誰が給仕をいたします。誰が采配を振ります？ うちじゆうに、一人でございますよ。

ヤーシヤ （ラネーフスカヤ夫人に）奥さま！ じつはお願いの筋がありますんですが、どうぞお聞きになつてください！ もしまたパリへお出かけになるようでしたら、後生でございます、わたしにお伴ともさせてくださいまし。ここにおりますことは、絶

対に不可能なんでして。（あたりを見まわし、声をひそめて）
今さら申上げるまでもなく、ご自身とうにご存知のとおり、何
しろ無教育な国で、民衆は品行がわるいし、それに退屈で、お
勝手の食べ物ときたら目もあてられませんし、おまけにあのフ
ールスのやつが、うろろうしおって、色々と愚にもつかんこ
とを、ぼそついておりますしねえ。わたしをお連れくださいま
し、お願いでございます！

ピーシチク登場。

ピーシチク どうぞ奥さん……ワルツを一番ねがいます……（ラ

ネーフスカヤ、彼と歩きだす）天女のような奥さん、とにかく百八十ルーブリは拝借しますよ……。ぜひ拝借しますよ……

（踊る）百八十ルーブリ……。 （広間へ移る）

ヤーシャ （そつと口ずさむ）「きみ知るや、わが胸のこの痛み……」

広間で、灰色のシルクハットに格子縞こうしじまのズボンをはいた人物が、両手を振ったり跳ねあがったりする。「ブラヴオー、シャルロツタさん、大出来、シャルロツタさん！」と口ぐちに叫ぶ。

ドウニヤーシャ　（立ちどまつて、白粉おしろいをはたく）お嬢さまつ
たら、あたしにも踊れつて仰おっしやるのよ——殿がたは大勢なの
に、婦人が少ないからつて。——でもあたし、踊つたおかげで
目まいがするわ、心臓がどきどきするわ。ちよいとフィールス
さん、今しがた郵便のお役人さんが、あたしに大変なことを仰
しやつたの、あたし息がとまりそうになつちやつた。

音楽がしずまる。

フィールス　なんと仰しやつたかい？

ドウニヤーシャ　あんたは花のようだ、ですつて。

ヤーシャ (あくび) 無学な連中だ…… (退場)

ドウニヤーシャ 花のようだ、ですつて。……あたし、そりやデ

リケートな娘だもので、うっとりするような言葉が大好き。

フィールス そろそろおっぱじめるな、お前さんも。

エピホードフ登場。

エピホードフ ああ、ドウニヤーシャさん、あなたは僕ぼくを見るのが、さも厭いやそうですね……虫けらかなんぞのように。(ため息をつく) あわれ人生よ、だ!

ドウニヤーシャ 何のご用ですか?

エピソードももちろんそりや、あなたの方が正しいのかも知れない。(嘆息する)しかし無論ですな、その……ある観点からすると、あなたという方は、まあ率直に言わせて頂くとですな、要するに僕を、こんな精神状態に落し入れてしまったと、あえて言わざるを得んです。僕は自分の宿命を承知している。僕の身には、毎日かならず何かしら不仕合せが起るし、僕はもうとうに馴れっこになって、おのれが運命を微笑をもって眺め^{なが}ています。要するにですな、あなたは一たん約束された。で、よしんば僕が……

ドウニヤーシャ どうぞそのお話は、のちほどに願いますわ。今はあたしを、そつとしておいてちようだい。だって、空想して

るんですもの。(扇をもてあそぶ)

エピホードフ 僕は毎日不仕合せにぶつかります。しかし僕は、あえて言えばですな、ただ微笑しています、いや、ハツハツハと笑ってさえいます。

広間からワーリヤ登場。

ワーリヤ お前まだここにいたの、エピホードフ？ ほんとに、なんていい加減な人間だろう。(ドウニヤーシャに) お前もあっちへおいで、ドウニヤーシャ。(エピホードフに) 玉突きをしてキューを折ったかと思えば、お客さま面づらをして客間を歩き

まわったりして。

エピソードフ こう申しては失礼ですが、あなたからお小言を頂く筋合いはありません。

ワリーヤ 小言なんか言つてやしない、話をしているんだよ。することと言つたら、仕事はそちのけで、ふらふら歩きまわることばかり。せつかく執事をやとつても、なんのためやら——
わかりやしない。

エピソードフ (ムツとして) わたしが仕事をしようと、歩きまわろうと、食べようと、玉を突こうと、それについてとやかに仰しやれるのは、物のわかった人か目上のかただけですよ。

ワリーヤ よくも言えたね、わたしにそんなことが！ (カツと

なつて）言つたわね？　つまりわたしが、わからずやだと言うんだね？　とつとと出てくがいい！　さあ今すぐ！

エピホードフ　（おしげ怖氣づいて）もう少々その、デリケートな言葉で、どうぞ。

ワリーヤ　（われを忘れて）さっさと出てけつたら！　さ、出てけ！　（エピホードフがドアの方へ行くのを、彼女は追う）十二の不仕合せめ！　お前のおいがプンとでもしたら承知しないよ！　二度とその顔を見せてもらうまい！　（エピホードフ退場。ドアの向うで、「あなたのことを、言いつけますからね」という彼の声がする）おや、また返つて来るんだね？

（ファイルスがドアのそばに立てかけておいた杖をつかむ）さ

あ来い……来るならおいで、目にももの見せてやるから。……来るんだね？ え、来るんだね？ よおし、こうしてやる……

(杖をふりあげる、とたんにロパーヒン登場)

ロパーヒン これはどうも恐縮。

ワリーヤ (怒りと嘲ちやうしやう笑をまぜて) 失礼！

ロパーヒン どうしまして。結構なご馳走ちそとうで、あつくお礼を。

ワリーヤ 礼には及びません。(その場から離れ、やがて振りかえって、やさしく尋ねる) お怪我けがはなかつたかしら？

ロパーヒン いや、なあに。もつとも、でっかい瘤こぶぐらいできそうですがね。

広間の声々 ロパーヒンが来た！ ロパーヒンさんだわ！

ピーシチク　いよう、これはこれは、ようこそご入来……（ロ
パーヒンにキスする）この可愛い男は、ちよつぴりコニヤツク
の匂いにおがするな、おい君。われわれもこの通り、愉快にやつと
るよ。

ラネーフスカヤ夫人登場。

ラネーフスカヤ　まあ、あなたでしたの、ロパーヒンさん？　ど
うしてこんなに遅かったの？　レオニードはどうしまして？
ロパーヒン　お兄さまも、一緒にもと戻られました。すぐ見えます…

…

ラネーフスカヤ（わくわくしながら）で、どうでしたの？ 競

売はありました？ さ、話してちょうだい！

ロパーヒン（嬉しさを外へ出すまいとして、しどろもどろに）

競売は四時ちかくに終わりました。……わたしたちは汽車に乗り
おくれたもので、九時半まで待たにやならなかつたんです。

（苦しそうに息をついて）ふうっ！ すこし頭がぐらぐらする

……

ガーエフ登場。右手には買物をさげ、左手で涙をふいている。

ラネーフスカヤ リヨーニヤ、どうだったの！ ねえ、リヨーニ

ヤー！ （じりじりして、涙ぐんで）早くして、後生だから……
ガーエフ （一言も答えず、ただ片手を振る。泣きながらフィールスに）これを取ってくれ。……アンチョビイと、ケルチ（訳注 クリミア半島の東端）のニシンとだ。……わたしは今日、なんにも食べなかつたよ。……ああ、まったくひどい目に会つた！ （玉突き部屋へのドアがあいていて、球の音と、ヤーシヤが「七と十八！」という声がきこえる。ガーエフの表情が變つて、もう泣かずに）いやもう、へとへとだ。なあフィールス、着がえさせてくれ。（広間を抜けて自分の居間へ去る。フィールスつづく）

ピーシチク どうだったね、競売は？ 話してくれよ、さあ！

ラネーフスカヤ 売れたの、桜の園は？

ロパーヒン 売れました。

ラネーフスカヤ 誰が買ったの？

ロパーヒン わたしが買いました。(間)

ラネーフスカヤ夫人、がつくりとなる。もし肘ひじかけ椅子いすとテーブルのそばに立っていないなかつたら、倒れたにちがいない。

ワリーヤはバンドから鍵かぎ束たばをはずし、それを客間中央の床へ投げつけて退場。

ロパーヒン わたしが買ったんです！ ちよつと待つてください、

皆さん、お願いです。わたしは頭がぼおつとしてしまつて、ものが言えないんです。……（笑う）わたしたちが競売場に着的てみると、デリガーノフはもう来ていました。ガーエフさんには、たった一万五千しかないのに、あのデリガーノフはいきなり、抵当額の上に三万と吹っかけてきました。こいつはいかんと思つて、わたしはやつを向うにまわして、四万と打つて出た。向うは四万五千とくる。そこでこっちは五万五千。つまり、やつは五千ずつ上げてくるのに、わたしは一万ずつ上げて行つた。……やがて、ケリがついた。抵当額の上に、わたしは九万と踏んばつて、まんまと落したんです。桜の園は、もうわたしのものだ！ わたしのものなんだ！（からからと笑う）ああどう

したことだ、皆さん、桜の園がわたしのものだなんて！ 言いたいなら言うがいい、わたしが酔っているだけでも、気が変だとしても、夢を見てるんだとでも……（足を踏み鳴らす）わたしを笑わないでください！ うちの親父おやじや祖父じいさんが、墓の下から出てきて、この始末を見たらどうだろう。あのエルモライが、なぐられてばかりいた、字もろくすっぽ書けないエルモライが——冬でもはだしで駆けまわっていたあの餓鬼が、まぎれもないそのエルモライが、世界じゆうに比べものもない美しい領地を、買ったのだ。そこでは親父も祖父さんも奴隷どれいだった、台所へさえ通しちやもらえなかった、その領地をわたしが買ったのだ。わたしが寝ぼけてるって、ただの夢だって、……気の迷い

だつて。……とんでもない、それこそあなたがたの得手勝手な
想像の、無知のやみに包まれた産物まぼろしなのだ。……（鍵束を拾
いあげ、うつとりほほえみながら）鍵を投げてつたな。もうこ
この主婦ではないというところを、見せようっていうんだな。
……（鍵束をがちやつかせる）ふん、まあどつちでもいい。
（オーケストラの調子を合せる音がきこえる）おおい、楽隊、
やってくれ、おれが聴いてやるぞ！ みんな来て見物するがい
い、このエルモライ・ロパーヒンが桜の園おのに斧をくらわせるん
だ、木がばたばた地面へ倒れるんだ！ どしどしここへ別荘を
建てて、うちの孫や曾孫ひいまごのやつらに、新しい生活を拜ませて
やるぞ。……楽隊、やってくれ！

音楽がはじまる。ラネーフスカヤ夫人は椅子に沈みこんで、はげしく泣く。

ロパーヒン（責めるように）一体なぜ、なんだってあなたは、わたしの言うことを聴かなかったんです？ わたしの大事な奥さん、お気の毒ですが、今となってはとり返しがつきません。（涙ぐんで）ああ早く、こんなことが過ぎてしまえばいい。なんとかして早く、今のようながたびしした、面白くもない生活あもしろが、がらりと変ってしまえばいい。

ピーシチク（彼の腕をかかえて、小声で）この人は泣いてるよ。

な、広間へ行こう、一人にしてあげたほうがいい。……行こうや。……（腕をかかえて。広間へ連れ去る）

ロパーヒン どうしたんだ？ 楽隊、しつかりやらんか！ なんでも、おれの注文どおりやるんだ！（皮肉に）新しい地主のお通りだ、桜の園のご主人さまのな！（うっかり小テーブルにぶつかり、枝付燭しよくだい台をひっくり返しそうになる）なんでも代は払ってやるぞ！（ピーシチクとともに退場）

広間にも客間にも、ラネーフスカヤ夫人のほか誰もいない。彼女は腰かけたなり、全身をすぼめて、はげしく泣いている。ひそやかな奏楽の音。いそぎ足でアーニヤとトロファイモフ

登場。アーニヤは母のそばへ寄り、その前にひざまずく。ト
ロフィーモフは、広間の入口に立つ。

アーニヤ ママ！ ……泣いてらっしゃるの、ママ？ いとしい、
親切な、やさしい、ママ。わたしの大事なママ、わたしあなた
を愛していますわ。 ……わたし、お祝いを言いたいの。桜の園
は売られました、もうなくなってしまうました。それは本当よ、
本当よ。でも泣かないでね、ママ、あなたには、まだ先の生活
があるわ。そのやさしい、清らかな心もあるわ。 ……さ、一緒
に行きましょう、出て行きましょうよ、ねえ、ママ、ここから
！ ……わたしたち、新しい庭を作りましょう、これよりずつ

と立派なのをね。それをご覧になったら、ああそうかと、おわかりになるわ。そして悦よろこびが——静かな、ふかい悦よろこびが、まるで夕方の太陽のように、あなたの胸に射さしこんできて、きつとニツコリお笑いになるわ、ママ！　行きましよう、ね、大事なママ！　行きましようよ！　……

——幕——

第四幕

舞台は第一幕に同じ。ただし窓のカーテンも壁の画えもなく、残わっている僅わずかの家具も一隅いちぐうに積みかさねられて、さしずめ売物とでもいった形。がらんとした感じがする。出口のドアのそばと舞台の裏とに、トランクや旅行用の包みなどが、積みかさねてある。左手のドアは開けはなしで、そこからワリーヤとアーニヤの声がきこえる。

ロパーヒンが立って、待ち受けている。ヤーシヤは、シャンパンのついでである小さなグラスを並べた盆をささげている。

次の間ではエピソードが、箱に縄なわをかけている。舞台裏手で、がやがやいう声。百姓たちが、お別れに来ているのだ。ガーエフの声で、

「いやありがとう、みんな、どうもありがとう」

ヤーシャ 下じもの連中が、お別れにやって来た。わたしはね、こういう意見なんです、ロパーヒンさん、民衆は善良だけけれど、どうも物わかりが悪いとね。

騒ぎが静まる。次の間を通って、ラネーフスカヤとガーエフが登場。彼女は泣いてはいないが、真まつ蒼さおで、顔がびくびく

ふるえて、口が利^きけない。

ガーエフ お前はあの連中に、財布をやつちまつたね、リユーバ。

それじゃいかん！ それじゃいかんよ！

ラネーフスカヤ わたし駄^だ目^めなの！ わたし駄^だ目^めなんだもの！

ふたり退場。

ロパーヒン (ドアの口から、ふたりの後ろへ) どうぞこちらへ、

お願いします！ お別れにほんの一杯。うっかり町から持って

来るのを忘れたもので、停車場でやっと一本だけ見つけました。

さあどうぞ！ （間）これは、皆さん！ おいやですか？

（ドアの口から離れる）そうと知ったら——買うんじやなかった。じゃ、わたしも飲むのはよそう。（ヤーシヤは用心しいしい盆をテーブルに置く）ヤーシヤ、せめてお前でも飲んでくれ。ヤーシヤ 旅立ちを祝します！ 残られる方がたもご息災で！

（飲む）このシヤンパンは、本物じやありませんぜ。うけあい
でさあ。

ロパーヒン 一本八ループリしたがな。（間）ここは、やけに寒
いなあ。

ヤーシヤ 今日^たは焚かなかったんでね、どうせ行つちまうんです
からね。（笑う）

ロパーヒン 何がおかしいんだ？

ヤーシヤ つい嬉うれしくつてね。

ロパーヒン もう十月だというのに、そとは日が照って、おだやかで、まるで夏みたいだ。普請ふしんには打ってつけだな。（時計を出してみ、ドアの口へ）皆さん、よろしいですか、発車までに四十七分しかありませんよ！　すると、二十分したら停車場へお出かけになるわけです。少々お急ぎ願いますよ。

トロフィーモフが、外がいとう套をきて外からはいつてくる。

トロフィーモフ そろそろ出かける時間らしいな。馬車も来てい

る。だが癩しやくだな、僕ぼくのオーバーシューズはどこなんだ。消えてなくなつちまつたよ。(ドアの口へ)アーニヤ、ぼくのオーバ―シューズがないんです！ 見つからないんです！

ロパーヒン わたしは、ハリコフへ行かなければならん。君たちと同じ汽車にするよ。ハリコフで、この一冬こすのさ。わたしはだいぶ長いこと、おつきあいであらぶらして、仕事にならんで閉口したよ。働かずにやられない性分だね、第一この両手の始末にこまるんだ。なんだか妙にこうブランブランして、まるで他人の手みたいだ。

トロフィーモフ おっつけ、みんな行つちまいますよ。そこでもた有益な事業とやらに、着手なさるがいいさ。

ロパーヒン どう、一杯やらないかね。

トロフィーモフ いや、結構。

ロパーヒン じゃ、こんどはモスクワかね？

トロフィーモフ そう、皆さんを町まで送って行って、あしたはモスクワだ。

ロパーヒン なるほど。……まあいいさ、大学の先生はみんな、君の来るまで、講義をせずに待つてるだろうからな！

トロフィーモフ よけいなお世話だ。

ロパーヒン 君は一体、大学に何年いるんだね？

トロフィーモフ 何かもつと、新しい手を考えたらどうだい？

その手は古いし、平凡だよ。（オーバーシューズをさがす）ね

え君、僕たちはこれで、おそらく二度と会う時はあるまい。そこで一つ君に、お別れの忠告をさせてもらいたいんだがね——両手を振りまわすな、これさ！ そのぶんぶん振りまわす癖を、ひとつやめるんだね。こんどの別荘建築案にしてもそれだ。やがてその別荘の連中が、だんだん独立した農場主になって行くだろうなんてソロバンをはじくこと——そんな目算を立てるところがそもそも、両手を振りまわすことなんだよ。……まあそれはそれとして、僕はやっぱり君が好きだ。君は役者か音楽家にもありそうな、やさしい華奢きゃしゃな指をしている。そして君の心もちも、根はやさしくて華奢なんだよ。……

ロパーヒン（彼を抱いて）じゃこれでお別れだ、ペーチャ君。

いろいろありがとう。もしいるんだったら、道中の費用に少し持って行かんかね。

トロフィーモフ　なんだって僕に？　いらないよ。

ロパーヒン　だって、ないじゃないか！

トロフィーモフ　あるさ。お志はありがとう。ぼくは翻訳料をもらったんだ。ちゃんとこのポケットにある。（心配そうに）しかし、オーバーシューズがないんだ！

ワーリヤ　（隣の部屋から）さっさと持ってって頂だい、この汚ならしいもの！（ゴムのオーバーシューズを一足、舞台へほうり出す）

トロフィーモフ　何をそう怒るんです、ワーリヤ？　ふん……こ

りや僕の「オーバーシューズ」じゃない！

ロパーヒン わたしはこの春、ケシを千町歩まいてね、今それで純益が四万あがった。そのケシが咲いた時にや、なんとも言えん眺め^{なが}だったよ！ まあそんなわけで、四万もうけたから、それでつまり貸したげようというのさ。できることだから言うのだ。何もそう乙に構えなくてもいいじゃないか？ わたしは百姓だ……ざつくばらんさ。

トロフィーモフ 君の親父^{おやし}が百姓で、僕の親父が薬屋だった、——といったところで、別にどうもこうもありやしない。(ロパーヒン紙入れを取りだす) やめてくれ、やめて。……たとえ二十万だしたって、受けとらないから。僕は自由な人間なんだ。

君たちみんなが、金持も貧乏人も一様にありがたがつて、へいつくばる物なんか皆、ぼくにとつちやこれっぽつちの権威もない。空中にふわふわしている綿毛も同然さ。僕は、君たちの世話にはならん、君たちがいなくなつて立派にやつて行ける。僕は強いんだ、誇りがあるんだ。人類は、この地上で達しうる限りの、最高の真実、最高の幸福をめざして進んでいる。僕はその最前列にいるんだ！

ロパーヒン　行き着けるかね？

トロフィーモフ　行き着けるとも。（間）自分で行き着くか、さもなければ、行き着く道をひとに教えてやる。

遠くで、桜の木に斧おのを打ちこむ音がきこえる。

ロパーヒン　じゃ君、ご機嫌きげんよう。もう出かける時刻だ。われわれお互いに、高慢そうな鼻つき合せちやいるけれど、時は遠慮なく、どんどん過ぎて行く。長いあいだつめて、疲れも知らず働いていると、わたしは頭のシコリがとれて、自分がなんのため生きているのか、それがわかるような気がする。それにしても君、このロシアにや、なんのためとも知れず生きている人間が、ずいぶんいるなあ。いや、まあどうでもいい、問題のサーキ流ユレーション　通　（訳注　聞きかじりの外来語をもちだしたおかしみ）

は、そこにはないのさ。世間のうわさじゃ、ガーエフさんが職

に就いたとかだ。銀行で、年に六千というんだが……。ただ、
続きそうもないな、あの不^ぶ精^{しょう}もんじやあ……

アーニヤ (ドアの口で) ママのお願いなんだけど、出かけるま
では、庭の木を伐^きらないでくださいって。

トロファイモフ ほんとにそうだ、君も気が利かないじゃないか。
…… (次の間を通過して退場)

ロパーヒン ただ今、ただ今。……なんという奴^{やつ}らだ、まったく。
(彼につづいて退場)

アーニヤ フィールスを病院へ送ったの？

ヤーシヤ 今朝そう言つとききましたから、送ったものと思われま
す。

アーニヤ　（広間を通つて行くエピホードフに）エピホードフさん、ファイルスを病院へ送つたかどうか、ちよつと調べてちようだいな。

ヤーシヤ　（ムツとして）今朝エゴールに言つとききましたたら。何を十ぺんも訊きくことがあるんです！

エピホードフ　ご老体のファイルスは、結局ぼくの意見によるとですな、もう修繕が利きません。先祖代々のところへ行くんですな。僕としては、ただただ羨せんぼう望ぼうに堪えんですよ。（トランクを、帽子のボール箱の上へ置いて、つぶしてしまふ）ほらこれだ、つまり結局。どうせそうだろうと思つてたよ。（退場）

ヤーシヤ　（あざけるように）二十二の不仕合せめ……

ワーニヤ (ドアの向うで) フィールスを病院へ送ったの？

アーニヤ 送りました。

ワーリヤ なんだって、ドクトル宛あての手紙を持って行かなかつた
んだらう？

アーニヤ それじゃ、追っかけて持たせてやらなけりや…… (退

場)

ワーリヤ (隣の部屋から) ヤーシヤはどこ？ おつ母さんがお

別れに来てるって、そう言つてちようだい。

ヤーシヤ (片手を振る) ちえつ、うんざりさせやがるなあ。

ドウニヤーシヤは、ずっと荷物のまわりであくせくしていた

が、今ヤーシヤが一人になったのを見すまし、そばへ寄る。

ドウニヤーシヤ　ちらりと一目ぐらい、見てくれたっていいじゃないの、ヤーシヤ。あなたは行つてしまうのね……あたしを捨てるのね……（泣きながら、男の首にすがりつく）

ヤーシヤ　何を泣くんだ？　（シヤンパンを飲む）六日すりや、

おれはまたパリだ、あした特急に乗りこんで、目にもとまらずフツ飛ばすんだ。なんだか本当にできないくらいだ。ヴィーヴ・ラ・フランス（訳注　フランス万歳！）か！　……ここはどうも性に合わないよ、とても暮して行けない……まあ仕方がないさ。無学な連中も、見あきるほど見たし——もうげんなりだ

よ。(シャンパンを飲む) なんの泣くことがあるんだね? 身もちさえよくすりや、泣くことにもならんのさ。

ドウニヤーシャ (懐中鏡を見ながら白粉おしろいをはたく) パリからお便りをくださいね。あたしあんたが、あんなに好きだったんだもの、ヤーシャ、あんなに好きだったんだもの! あたし華奢な女なのよ、ヤーシャ!

ヤーシャ おい、誰だれか来るぜ。(トランクのそばを、さも忙しそうに立ち回り、小声で鼻唄はなうたをうたう)

ラネーフスカヤ、ガーエフ、アーニヤ、シャルロツタ登場。

ガーエフ そろそろ出かけなくちや。もう幾らもないぞ。(ヤー
シヤを見て) 誰だい、ニシンの臭いにおをぶんぶんさせる奴は？

ラネーフスカヤ 十分ほどしたら、馬車に乗りこみましようね。

……(部屋をぐるりと見まわす) さようなら、なつかしい家うち、

昔なじみの家おじいさんの精。冬がすぎて春になると、お前はもういな

くなる、こわされてしまう。この壁も、いろんなことを見てき

たのねえ！ (娘に熱くキスする) わたしの大事なアーニヤ、

おまえはキラキラ光っているわ。二つのダイヤモンドのように、

お前の眼めはきらめいているわ。嬉しいの？ そんなに？

アーニヤ ええ。とても！ 新しい生活が始まるんですもの、マ

マ！

ガーエフ（浮き浮きして）まったく、これでやっと万事めでたしき。桜の園の売れちまうまでは、われわれは始終わくわくして、えらい苦労だったものだが、こうして問題がきつぱり決着して、もうどうもならんとなつてからは、みんな気持が落ちついて、かえつて陽気になつたくらいだ。……わたしは銀行の勤め人で、今やいっぱしの財政家だ……黄玉は真ん中へ、さ。そしてリユーバ、おまえだつて、なんのかのと言うけれど、とにかく血色がよくなつたよ、それは確かだ。

ラネーフスカヤ ええ。神経はだいぶ収まりました、それは本当よ。（召使の手から帽子と外套を受けとる）よく寝られるようになったし。わたしの荷物を運び出しておくれ、ヤーシヤ。も

う時間だわ。(アーニヤに)それじゃアーニヤ、近いうちに会いましょうね。……わたしはパリへ行って、ヤロスラーヴリのおばあさまが領地を買いもどせと送ってくださいだった、あのお金で暮すつもり——おばあさまも、どうぞお達者でね! ——でも、あのお金だって、長くはもつまいよ。

アーニヤ ママ、じきに帰ってらっしゃるんでしょう、じきに：
：ね、そうでしょう? わたしは、勉強して、女学校の検定試験をとおって、それから働いて、ママの暮しを助けるわ。そうしたらママ、一緒に色んな本を読みましょうね。……そうじゃなくて? (母の両手にキスする)ふたりで、秋の夜長に読みましょうね。どっさり読みましょうね。するとわたしたちの前

に、新しい、すばらしい世界がひらけるんだわ。……（夢想する）ママ、帰ってらしてね……

ラネーフスカヤ 帰って来ますよ、可愛^{かわい}いおまえのところへ。

（娘を抱きしめる）

ロパーヒン登場。シャルロツタはそつと小曲を歌っている。

ガーエフ シャルロツタはいいなあ、歌なんか歌ってる！

シャルロツタ （くるまれた赤んぼのような格好をした包みをかかえて）わたしの赤ちゃん、ねんねんよう……（オギヤア、オギヤア！ ……という泣き声をする）おお、よしよし、いい子、

いい子。(オギャア! ……オギャア! ……)
誰が誰が! (包みを元の場所へ投げだす) だからあなた、お願
い、勤め口をさがしてちょうだいよ。これじゃ、どうしよう
もないわ。

ロパーヒン さがしたげますよ、シャルロツタさん、大丈夫です。
ガーエフ みんな、われわれを捨ててくんだな、ワーリヤも行っ
ちまうし……どうもとたんに、用なしの人間になっちまった。
シャルロツタ 町にはわたし、住むうちもないし。出てかなきや
ならないわ。……(小曲を口ずさむ) どうせ同じことさ……

ピーシチク登場。

ロパーヒン よう、天然記念物！ ……

ピーシチク （息を切らして）やれやれ、まあ一息つかしてください

さい……へとへとだ。……皆さん、ご機嫌……。水をいっぱい

……

ガーエフ どうせまた金のことだろうか？ 桑原桑原、まっぴらご

免……（退場）

ピーシチク 久しくごぶさたしましたなあ……奥さん……（ロパ

ーヒンに）君もいたのか……こいつは嬉しい……よう、天下一

の知恵ぶくろ……取ってくれ……まあこれを。……（ロパーヒ

ンに金を渡す）四百ルーブリだ……あとまだ八百四十、借りに

なってるが……

ロパーヒン　（けげんそうに肩をすくめる）こりや夢のようだ。

……一体どこで手に入れたんだね？

ピーシチク　まあ待ってくれ……暑い……。

前代ぜんだい未聞みもんの大事件

なんだ。わしのところへイギリス人どもがやって来てね、地面から何か古い粘土を見つけたのさ。……（ラネーフスカヤ夫人に）あなたにも四百……な、天人のような奥さん。……（金をわたす）あとはまた後ほど。（水を飲む）今しがた、どこかの若い男が汽車の中で話しておったが、なんとかいう……偉大な哲学者は、屋根から飛びおりろ、と勧めておるそうだ……「飛びおりろ！」——それだけのことだ、とな。（仰天したように）

こりやどうだ！ 水を一杯！ ……

ロパーヒン イギリス人って、いったい何者かね？

ピーシチク とにかくその連中に、粘土の出る地面を向う二十四年間、貸したんだ。 ……とここで今は、申しわけないが暇がない ……話の先を急ぐんでね。 ……これから、ズノイコフのところへ行く ……それからカルダーモノフのところへもね。 ……みんな借りがあるのさ。 ……（飲む）ではこれで失礼。 ……木曜にまた伺います ……

ラネーフスカヤ わたしたち、すぐこれから町へ引越して、あしたわたしは外国へ「発たちますの」 ……

ピーシチク なんですと？ （そわそわして）なぜまた町へなん

ぞ？ いや、なるほどこうして見ると、家具だの……トランクだの……。なあに、平気ですよ。……（涙ごえで）大丈夫ですよ。……いやどうも、えらい知恵者ですなあ——あのイギリス人というやつは……。なあに大丈夫……。どうぞお仕合せで……。なんでもありませんよ。……神さまが助けてくださいいますとも……。大丈夫ですよ。……この世のことは何ごととも終りありでしてな。……（ラネーフスカヤ夫人の手にキスする）もし風の便りにでも、このわたしに終りが来たという噂うわさがお耳にはいったら、どうか、このそれ……。馬のことを思いだして、「そうそう、昔あのなんとかいう奴……。シメオーノフルピーシチクという男もいたっけな……。安らかに昇天せんことを」とでも言ってくだ

さい。……いや、すばらしい上天気ですなあ。……まったく……
：（へどもどして退場。が、すぐ引返してきて、ドアのところ
で）うちのダーシエンカが宜しくと申しました！（退場）

ラネーフスカヤ さ、これでもう出かけられる。じつはわたし、
発って行くのに、気がかりなことが二つあるの。一つは——病
気のフィールス。（時計をのぞいてみて）まだ五分ほどいいわ
……

アーニヤ ママ、フィールスはもう病院へやったわ。ヤーシャが
けさやったの。

ラネーフスカヤ もう一つの心配は——ワーリヤのこと。あの子
は、早起きをして働きつけてるものだから、今じゃ仕事がなく

て、魚が水をはなれたも同然よ。痩せて、顔色が悪くなって、可哀そうに泣いてばかりいるわ。……（間）あなたはそれを、よくご存じのはずね、ロパーヒンさん。わたしはこう思っていましたの……あの子をあなたのところへとね。それにあなたのほうでも、お見受けするところ、結婚なさりそうな模様でしたものね。（アーニヤに耳うちする。アーニヤはシャルロツタにうなずいて見せ、ふたり退場）あの子はあなたを愛していますし、あなたもあれがまんざらでもなさそうなのに、わからないわ、どうもわからない、なぜあなたがた二人は、おたがい避け合うようなふうをなさるのか。わからないわ！

ロパーヒン わたし自身も、じつはわからないんです。どうも何

かこう妙な具合でしてね。……まだ時間があるようなら、わたしは今すぐでも結構です。……一気に片をつけて——あがりになります。あなたがいらっしやらなくなると、どうもわたしは、申込みをしそうもありませんよ。

ラネーフスカヤ 願ったりですわ。一分もありや、じゅうぶんですものね。すぐあの子を呼びましょう。

ロパーヒン ちょうどシャンパンもあります。（小型グラスをすかして見て）おや、空^{から}だ、誰かもう飲んじまった。（ヤーシャ ^{せきぼら} 咳払いをする）がぶ飲みとはこのことだ……

ラネーフスカヤ （いそいそと）結構だわね。わたしたちは向うへ……ヤーシャ、おい^アで！ いま呼びますからね……（ドアの

口へ）ワーリヤ、そこはほつといて、こつちへおいで。さ、早く！
（ヤーシヤとともに退場）

ロパーヒン （時計をのぞいて）そう……（間）

ドアの向うで忍び笑い、ひそひそ声、やがてワーリヤ登場。

ワーリヤ （長いこと、あれこれと荷物を調べる）おかしいわ、
どうしても見つからない……

ロパーヒン 何がないんですか？

ワーリヤ 自分でしまいこんだくせに、覚えがないんですの。

（間）

ロパーヒン あなたはこれからどうされます、ワルワーラ（訳注

ワーリヤの正式の名）さん？

ワーリヤ わたし？ ラグーリンのところへ行きます。……あす

この家政を見ることになりましたの……女の家令とでもいうのかしら。

ロパーヒン ではヤーシネヴオ村ですね？ 七十キロもあります

よ。（間）いよいよこの家の生活もおしまいになりましたね。

……

ワーリヤ（荷物を見まわしながら）どこへ行ったんだろう、あ

れは……もしかすると、長持へ入れたのかもしれない。……え

え、この家の生活もおしまいですわ……もう二度と返っては来

ませんわ……

ロパーヒン わたしはこれからすぐ、ハリコフへ発ちます……この汽車でね。どうも仕事が多くてね。この屋敷うちには、エピソードを置いておきます。……あの男を雇ったのでね。

ワーリヤ あら、そう！

ロパーヒン 去年の今ごろは、もう雪がふっていました。おぼえておいでですか。ところが今は、おだやかで、日が照っています。ただ、寒いには寒いですな。……零下三度ぐらいでしょうな。

ワーリヤ わたし見ませんでした。(間) それに、うちの寒暖計

はこわれていますから……(間)

戸外の声 (ドアの口で) ロパーヒンさん! ……

ロパーヒン (とうからこの呼び声を待っていたかのように) あ

あ、今すぐ! (急いで退場)

ワーリヤは床に坐^{すわ}つて、衣服の包みに頭をのせ、静かにむせびなく。ドアがあいて、そつとラネーフスカヤ夫人がはいつてくる。

ラネーフスカヤ どうだったの? (間) もう行かなくちや。

ワーリヤ (もう泣きやんでいて、眼をふく) ええ、時間ですわ、ママ。わたし今日のうちに、ラグーリンのところへ着けると思

うわ。汽車に乗りおくれさえしなければね……

ラネーフスカヤ　（ドアの口へ）アーニヤ、支度はいいの？

アーニヤ、少しおくれてガーエフ、シャルロット登場。ガーエフは頭巾ずきんのついた暖かい外套がいとうを着ている。召使たちや馭者よしやたちが集まる。エピソードフは荷物の世話をやく。

ラネーフスカヤ　さあ、もうこれで発てるわ。

アーニヤ　（嬉しうれそうに）出発だわ！

ガーエフ　親愛なる諸君、敬愛おくあたわざる友人諸君！　いま

永遠にこの家を去るに臨んで、果して口をつぐんでおられまし

ようか。告別のため、今わたくしの全幅を領している感慨を、

ここに吐露せずにおられましようか……

アーニヤ （哀願するように）伯父さま！

ワーリヤ 伯父さん、およしなさいったら！

ガーエフ （しよげて）黄玉を空からクツシヨンで真ん中へ……。黙

るよ。……

トロファイモフ、つづいてロパーヒン登場。

トロファイモフ まだですか、皆さん、もう出発の時間ですよ！
ロパーヒン エピホードフ、おれの外套を！

ラネーフスカヤ わたし、もうちよつとだけ坐ってみよう（訳注
旅立ちの前に、しばらく腰をおろす習慣がロシア人にある）。

わたしまるで、今まで一度も、この家の壁がどんなだか、天井
がどんなだか、見たことがないみたい。今になってやつと、見
ても見飽きない気持で、たまらなく懐^{なつ}かしい気持で、眺^{なが}めるん
だわ……

ガーエフ いまだに覚えてるが、わたしが六つするとき、トロイツァ聖霊降臨
の日曜日に、わたしがこの窓に腰かけて見ていると、お父さん
が教会へ出かけて行ったつけ……

ラネーフスカヤ 荷物はみんな出まして？

ロパーヒン どうやら、みんなです。（外套を着ながら、エピホ

ードフに) いいかい、エピソード、あとは宜しく頼むよ。

エピソード (しやがれ声で) ご心配なく、行つてらっしゃいまし。

ロパーヒン 一体どうしたんだ、その声は？

エピソード いま水を飲んだ拍子に、何かのみこみましたんで。

ヤーシヤ (軽蔑^{けいべつ}して) 間抜けめ！

ラネーフスカヤ わたしたちが行つてしまうと、ここには人っ子ひとり残らないのねえ……

ロパーヒン 春が来るまではね。

ワリーヤ (包みから洋傘^{ようがさ}を抜きだす。まるで振上げるような

格好になる。ロパーヒン、ぎよつとした身振り) あら、何です

の、どうなすつたの……。わたし、そんなつもりじゃなかったのに。

トロフィーモフ 皆さん、さあ乗りこみましょう。……もう時間です！ 間もなく汽車がはいりますよ！

ワーリヤ ペーチヤ、さ、あつたわ、あんたのオーバーシューズ。手提カバンのかげに。（涙ぐんで）でもあんたの、なんて汚ならしい、おんぼろなの……

トロフィーモフ （オーバーシューズをはきながら）さあ行きましょう、皆さん！ ……

ガーエフ （泣きだしそうになり、ひどくうろたえる）汽車が……その、停車場が……。ひねって真ん中へ、白玉は空からクツシヨ

ンで隅^{すみ}へ……

ラネーフスカヤ 行きましょう！

ロパーヒン みんなお揃い^{そろ}ですね？ 向うには誰もいませんね？

（左側のドアに錠をおろす）ここには家財が置いてあるので、錠をおろしとかなければね。さあ行きましょう！ ……

アーニヤ さようなら、わたしの家^{うち}！ さようなら、古い生活！

トロフィーモフ ようこそ、新しい生活！ ……（アーニヤと一

緒に退場）

ワーリヤは部屋を一わたり見まわし、ゆつくりと退場。ヤー
シヤ、および犬を連れてシャルロットも退場。

ロパーヒン では、春まで。さ、行こうじゃありませんか、皆さん。……ご機嫌きげんよう！ ……（退場）

ラネーフスカヤとガーエフ、ふたりだけ残る。ふたりはそれを待ち兼ねたように、たがいにぱつと頸くびに抱きつき、人に聞かれぬように声を忍んで、静かにむせび泣く。

ガーエフ （身も世もあらず）ああ妹、可愛い妹……

ラネーフスカヤ ああ、わたしのいとしい、なつかしい、美しい庭！ ……わたしの生活、わたしの青春、わたしの幸福、さよ

うなら！ ……さようなら！ ……

アーニヤの声 （浮き浮きと、招き寄せるような声で） ママ！

…

トロフイーモフの声 （浮き浮きと、感激をこめて） おーい！

…

ラネーフスカヤ お名残りにもう一度、壁を見て、窓をながめて
…。亡なくなつたお母さまは、この部屋を歩くのが好きだつ

たわ。 ……

ガーエフ ああ妹、可愛い妹！ ……

アーニヤの声 ママ！ ……

トロフイーモフの声 おーい！ ……

ラネーフスカヤ　いま行きますよ！
（ふたり退場）

舞台からになる。方々のドアに錠をおろす音がして、やがて馬車が数台出て行く音がきこえる。ひっそりとする。その静けさのなかに、木を伐るき斧のおのにぶい音が、さびしく物悲しくひびきわたる。

足音がきこえる。右手のドアから、フィールスが現われる。ふだんのとおり、背広に白チヨツキをつけ、足には室内ばきを穿はいている。病気なのである。

フィールス　（ドアに近づいて、把手とってにさわってみる）錠がおり

ている。行ってしまったんだな。……（ソファに腰をおろす）
わしのことを忘れていったな。……なあに、いいさ……まあ、
こうして坐つていよう。……だが旦那さまは、どうやら毛皮外
套パも召さずに、ただの外套でいらしたらしい。……（心配そう
な溜息ためいき）わしの目が、つい届かなかつたもんでな。……ほん
とに若えお人わけというものは！（何やらぶつぶつ言うが、聞き
とれない）一生が過ぎてしまった、まるで生きた覚えがないく
らいだ。……（横になる）どれ、ひとつ横になるか。……ええ、
なんてぎまだ、精も根もありやしねえ、もぬけのからだ。……
ええ、この……出来そこねえめが！……（横になったまま、
身じろぎもしない）

はるか遠くで、まるで天から響いたような物音がする。それは弦の切れた音で、しだいに悲しげに消えてゆく。ふたたび静寂。そして遠く庭のほうで、木に斧を打ちこむ音だけが聞こえる。

—幕—

青空文庫情報

底本：「桜の園・三人姉妹」新潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年8月30日発行

1990（平成2）年8月20日47刷改版

2000（平成12）年3月15日82刷発行

※底本の二重山括弧は、ルビ記号と重複するため、学術記号の「≫」（非常に小さく、2-67）と「≪」（非常に大きく、2-68）に代えて入力しました。

※二重ハイフンは、「＝」（等号、1-65）で入力しました。

入力：大野晋

校正：鈴木厚司

2010年3月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桜の園

——喜劇 四幕——

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 アントン・チェーホフ

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>